
サイキョウショウジョ

早稀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サイキョウシヨウジヨ

【Nコード】

N1004J

【作者名】

早稀

【あらすじ】

群雄割拠の秦が丘高校に突如現れた最強の少女は、どう見ても「地味」としか形容のしようがない、油断するなという方が無理な目立たない1年生だった。登場人物中、主人公が一番地味という学園格闘活劇の開幕です。

01 新の敗北

よく見れば美形かもしれないが、あまりにもその存在が地味で目立たない。メイクも無ければ髪型も地味としか言いようがないセミロング。特徴が無さ過ぎるのが特徴か。

そんな一年生に、しかも女子生徒に、何の警戒心が持てるだろうか。

私立秦が丘高校ボクシング部所属、体育科二年D組日比野新は、心の底から叫びたかった。

「聞いてねーぞ！」

が、まさか後輩や同級生たちも見ている前で、おおっぴらに醜態をさらすわけにもいかない。心の叫びはぐっと飲み込んで、相手をにらみつけるしかなかった。

それにしても。

なんなんだ、この風景は。

新の理解の範囲を越えている。

同じボクシング部の後輩が3人、目の前でうめき声を上げ、あるいは完全に意識を失った状態で倒れている。どれも一年とはいえ、中学時代にボクシングか他の格闘技を経験していた者ばかりで、体格も、小柄な新より2階級も3階級も上の大きさである。

いくら不意を突かれたとはいえ、160センチそこその痩せた少女に襲われたところで、どうにかなってしまふ図体ではない。

ない、はずだった。

少女は今、無表情に腰に手を当てたまま、新に向かって半身を開くようにして立っている。右足を引き、左肩を新に向けているのは、利き手が右手という証拠だろうか。

「お前」

新は沈黙に堪えかねて口を開いた。

「ボクシング部に正面から喧嘩売ってるって、わかってやってんだ

ろくな」

体は小さいが、新は部の二年のトップである。格闘技では階級は絶対で、軽量の選手が自分より重い階級の相手を倒すのは至難の技になるが、新はすくなくとも1階級違い程度の部員に負けたことはないし、2階級上という程度なら、同級生以下に敵はいない。

ましてまだ新入生気分が抜けきらない今の一年生などは、束になつてかかつてこようが負ける気はしない。

その迫力は、新には備わっているはずだ。少なくとも、新が校内を歩いていて、なめた視線で見てくるような下級生はいない。

ところが、たった今日の前にいる一年生は、ひどく静かな目で、新を見返している。肩には気負いも無くて、他人の子供を無感動に眺めている大人のような顔をしていた。

何も言葉を返して来ない下級生にいらいらして、新がさらに怒鳴ろうとした時、下級生が力のこもらない声を出した。

「その通り」

髪は黒く、日焼けしていない肌は白い。ショートボブがそのまま長くなりました、という髪型には色気が無く、かろうじてさらさらした質感が清潔感を出していた。

「日比野先輩には何の恨みも無いけど、真っ正面から喧嘩を売らせてもらふ」

それはひどくあっさりした口調で、まわりのざわざわした気配に紛れて消えてしまいそうでもある。

新は本気で腹が立ってきた。

下級生の女子相手に新が本気になったところで、得をすることは何も無い。せつかくこれまで築いてきた声望に傷が付くだけだろう。それでも、こうまで小面憎く喧嘩を売られてしまえば、それを買う買わないは別として、自分から腰を引くわけにもいかない。なめられっぱなしでは生き残れない。

「まずは度胸だけは買ってやるよ」

新はそういいながら、相手をさらに素早く観察している。

足元に転がっている不甲斐無い後輩連中が、どうやられたのかを直接見ていたわけではない。ただ、うめき声を上げている後輩連中の様子を見たり、大慌てで新を呼びに来た後輩の話を聞くと、この一見かよわげな少女は、空手の技を繰り出したらしい。正統派の正拳突きがまともに胃に入ったらしい後輩が一人、吐き出した胃液にまみれながら悶絶している。

ボクシングには足技が無いし、肘撃ちも禁止されている。それでも、ボクシングの技術があれば、それらをかわしてパンチを叩き込むことはさほど難しくはない。どんな技を使ってこようが、対抗する腕はある。

来るなら来い、返り討ちにしてやる、と新が気を入れた、その瞬間だった。

彼女が、そこにいた。

新の正面。

顔と顔の距離は1メートルを切っていただろう。

視線を切った記憶も無い。油断した自覚も無い。

ほんの一瞬の間に、少女が新の前で低い姿勢を取っていた。

やばい、と新が本能的に身を引こうとした。ほとんど反射に近い動きだったから、足がついていかずに、上半身だけのスウェーバツクの体勢になりかける。

少女の動きは、だが新の動きより数段早い。

腰を落として右肩を新の間合いにねじ込むように踏み込んだ少女は、新の上半身が反応する出鼻に、開いた右手をみぞおち辺りに当てていた。

当てただけ、と、周りには見えていただろう。速くても、強い打撃には見えない。

だが新の体は不思議な動きを見せた。

荷重が踵に移りかけていた瞬間に撃たれたからか、新の腰が浮いた。上半身が水平に滑るように飛び、下半身は地面から弾かれるように跳ね上がった。

そして、突然の衝撃に顔が苦痛に歪むわずかな間に、新の男子としては小柄な体躯が、宙を舞う。

高さは無い。頭の高さはほとんど変わらず、そのまま水平に吹き飛んで行く。

非現実的な光景は、新が重力と慣性の法則に従い、きりもむようにして地面に叩き付けられるまでの1秒間続いた。ごくわずかな時間のはずが、凝縮された非現実感のおかげで、ギャラリーにとっても、あるいは新にとっても、ずいぶん長く感じられた。

まるで巨大な鉄球でもぶち当てられたような、と新は後に表現している。ボクシングや空手の打撃とは、何かが根本的に異なっている。

無様な着地を強いられた新は、全身を貫いた衝撃に息が詰まった。腹に受けた打撃の凄まじさは、内臓がすべて逆流してくるのではないかと思うほどだった。

周囲は一瞬静まり返り、それからどよめきが波のように広がっていった。

時間帯は放課後の5時前。部活は今が佳境のはずで、校舎中央の出口から大グラウンドに向かう道からわずかに外れた広場にいる人々は、ほとんどが部活に所属していないか、早めに切り上げた文化部員たちか、あるいはボクシング部の関係者というところ。

格闘技をさほど知り抜いている人間が集まっているわけでもなかったが、そんな素人の目にも、今日の前で起きたことが異常な、凄まじい出来事だということは明らかだった。

立ち上がるどころか、ねじれた体勢で転がったまま身じろぎもできずにいる新のそばで、少女は静かに姿勢を戻した。

いまだき信じがたいことに校則どおりの、ひざが隠れる程度の丈にしたスカートを翻すこともなく、少女は何事もなかったかのように柔らかな表情を見せ、さっきよりは多少張りのある声を出した。

「これは喧嘩でも勝負でもないわ。私の力も知らないでやりあったって、本気なんか出せるわけないものね」

声そのものは幼さを残しているのに、口調はひどく大人びている。
「だからノーカンね。本当の勝負はまた後日ってことで」

そういうと、少女は新に背を向けた。

少女の前には、少し離れてボクシング部の一年部員たちが何人かいたが、彼女の視線を真正面に受けて、思わずたじろいだ。すでに
気組みで負けている。

と、少女は歩き出そうとして、何かに気付いたように立ち止まり、
もう一度新を見た。

「ああ、そうだ。私は」

新がどうにかその方向に顔を向けると、少女は新に顔を見せるようにしゃがみこんだ。

「普通科一年A組、岩崎涉己。^{いわさきしょうじ}よろしく、先輩」

そういうと、祥己はにっこりと微笑んだ。屈託のない、掌底突き
で大の男を黙らせた少女のものとは到底思えないような笑顔だった。

01 新の敗北（後書き）

少しだけ書き溜めがありますが、それを使い切ると書く暇がないという現実。ちよろちよると書き続けていきますので、長い中断のときもご容赦を。

02朝の教室

涉己が目立つ存在だったことは、秦が丘高校入学以来一度も無い。
「しょうちゃん」

と彼女に呼びかける親友の方がよほど目立っている。

「数学の宿題、やってきた？」

「一応は」

涉己が少し構えた表情で答えると、親友は、恐ろしく整った顔立ちを疑わしげに歪めた。

「すぐく手抜きしてる予感がする。見せて」

小林美紀、小学生以来の付き合いで、腐れ縁というにはあまりにも深すぎる縁がある。

特に目立つ印象も無い涉己が、誰が見ても美少女という美紀に、仕方ないなという顔でノートを差し出す。美紀がそれを受け取り、中を一瞥してため息をつく。

「問題書き写しただけじゃない」

「解く力が無かっただけよ。結果は出てなくても努力は認めてよ」

「うそつき、やればできるくせに」

美紀の口調は容赦ない。

「そうやって口でごまかそうとしたって、成績は上がらないんだよ」
「わかってるけどさー」

「数学なんて、しょうちゃん、一度も苦労したこと無いじゃない」

「んなことないわよ。苦手科目だってば」

「自称、ね」

声に情けのかけらも無くなってきた。そろそろ本気で怒り出す気配だ。

「悪かったって。時間が無かったの」

「どうせ『あっち』に熱中し過ぎたんでしょ」

「熱中っていうか……むしろあっちが本業だしねえ」

「だからって成績落としちゃだめでしょ。また出入り禁止になるよ、中三の時みたいに」

「うーん…… あれは勘弁してほしいなあ」

朝の会話は他の生徒たちの声にまぎれ、埋もれている。どちらも声が大い方ではないし、身振り手振りも無い。ごくおとなしい二人が、ごくおとなしく会話しているようにしか、少なくとも入学から2ヶ月そこその周囲には見えていない。

秦が丘高校は、普通科の他に特進科、体育科、芸術科、工業科、商業科を持つ大規模な私立の総合高校。少子化・進学率増加のあおりを受けて工業科や商業科は風前の灯という感じでも、県下最大級の高校として、あるいはスポーツの全国的な名門校として、その名を知られている。

科として最も大きいのが普通科で、一学年12クラス。特進科、体育科、芸術科はそれぞれ6クラスずつ、工業科と商業科は3年前から5クラスになった。といっても、体育科や芸術科はひとクラスの人数が他の科より少ないから、実数としては工業科などとあまり変わらない。

美紀は、新人生随一の美形としていきなり有名になったが、定期テストが明けると、その頭の良さが知られるようになった。普通科一年の総合成績で3位になったからだ。

あくせく勉強している雰囲気は無く、泰然としているのにその成績だったから、美紀の中学時代を知らない同級生たちは驚いた。

同じ公立中学校出身の同級生たちにとっては、美紀が同じ秦が丘に進むにしても、どうして特進科を受けなかったのかが不思議だったらしい。中学時代も、淡々と学年トップクラスを維持していたという。

色素の薄い感じがする美紀の顔立ちはごく日本的だが、瞳が大きいから純和風というほどではない。周囲にメイクバリバリの女がいても、せいぜいリップ程度しかつけていない美紀がかすむことはないから、よほど元がいいということだろう。

「みんなにしようちゃんのお目付け役って頼まれてる私の立場にもなってるよ」

とふくれてみせた表情は、間違いなく、垣間見てしまった男子生徒の9割方を恋に叩き落す。

「そうだよ」

と、いきなり少年の声が割り込んできた。美紀を相手に一度も揺らいだことがないという奇人、矢木澤隆治やきさわりゅうじが立っていた。

「まあ、何のことかわかんないけど」

「じゃあ入ってくるなよ」

平凡を絵に描いたような姿の涉己が突っ込む。苦笑しながら美紀が隆治にあいさつする。

「お早う」

「おう」

隆治も小学生以来の仲で、三人は幼馴染とっいていい。入学当初は、校内の話題をさらった美少女の隣にいる男子ということで、色々嫉妬も浴びた隆治だが、今ではお互いに色恋の感情がまるで無いことが知られていて、むしろ「紹介しろよ」という声に辟易している、というのが現状らしい。

すらりとした姿勢のいい少年で、緩やかな天然パーマの髪が、ギリシア彫刻のようだろうと本人はいつている。彫りも深めではつきりした顔立ちだから、確かに地中海系のルックスとっいていえないことはない。

「数学の宿題か？」

「そう。問題だけ写して、ちょっとは苦労したんだよって感じに荒らしてあるの」

「解けばいいのにな」

「そう思うでしょ？」

「帰りの時間は俺と一緒にだっただから、それくらいできただろ」
「帰ってから忙しかったんだもん」

二人に責められて、涉己は不機嫌そうに口を尖らせている。

「忙しいのは俺のほうの上だと思っただけだな」

「りゅうちゃん、昨日も料理当番だったの？」

美紀が訊くと、隆治は白いワイシャツの襟元に触れながらうなずいた。

「最近ほとんど俺だな。親父は納期がどうこういつて遅いし、妹は部活に慣れなくてへろへろだし」

隆治は父子家庭で、小学生のころから家事全般をこなしてきた。

家庭科の成績で５段階の５以外を取ったことがないという強者だ。

「家事が終わってから勉強する苦労人もいるのに、しょうちゃんは姑息な手を使ってたわけね」

「なにより、隆治はちゃんとやってあんの？」

完全に劣勢になった涉己がつつくと、隆治は肩にかけたままのバッグからノートを取り出した。開いたページを女子二人で見ると、嫌味なほどきれいな計算と解が並んでいる。数字がひとつもずれずに、プロの技術者が清書した書類のように並んでいた。

涉己は渋い顔をしてすぐに目を離し、美紀は感心している。

「相変わらずきれいなえ」

「家事も字も、きれいに越したことはないしな」

主夫、の発言だろう。

涉己はそんな発言など取り合うだけ自分が不利だと悟ったらしく、あからさまにそっぽを向いている。

この三人、美紀が超絶美形、隆治がまた地中海系美形ときて、どちらも成績優秀品行方正の優等生ときているから、とにかく目立つ。その中で、涉己の存在感だけが薄い。

頭が悪いというほど悪くはなく、といって誇れるほど優秀なわけでもなさそうで、品行方正というよりは目立つことを何もしないというだけのことのようで、とにかく特徴が見えてこない。

よく見ればきれいな顔立ちをしている、といわれるのは、たぶん慰めだろうと本人は断言している。おそらくクラスの中で唯一ではないかと思われる、校則遵守の制服姿がかえって目立つ、という程

度だろうか。

自分が自分が、というタイプではなさそうだし、自分から友達を求めて積極的に話しかけたりしている姿も見られない。多くの友達に囲まれている光景も皆無だし、だからといって人の輪から離れたがるということもない。

まったく目立たない。

その目立たない涉己が、突然学園を揺るがす大事件の中心人物として、校内の話題を独占することになるなど、この日の朝まで予測できた人間いなかっただろう。

03 放課後

きっかけは、放課後しばらくして訪れた。

渉己は生粋の帰宅部で、いつもは授業が終わるとひっそりと帰途に就き、放課から30分も校内にいることはほぼありえないことだった。

それがこの日に限って、長く居残ることになっていた。

原因は数学の宿題。

「出したことだけは褒めてやるがな、出せばいいってもんでもないんだよ」

渉己のクラスの担任が数学担当で、提出していない生徒には放課後の居残りを命じたのだが、渉己もその中に入ってしまった。まったく解いた形跡がないノートは、さすがに黙って認めるわけにはいかなかったらしい。

「申し訳ありませんでした」

素直に謝罪し、渉己は問題に取りかかった。このあたりで抵抗のひとつでもすれば多少は目立つのだろうが、そういうエネルギーには欠けている様子だった。

数学は苦手科目だ、と美紀にはいつていた渉己だが、そうでもないらしいことは、程なく解答を終わらせてとっと帰ろうとしたあたりに見えてくる。他の生徒たちが1時間たってもうなっていたりする課題を、渉己はものの10分で片付けていた。

「こんなに早く終わるんなら普通にやってこいよ」

と担任が口にしたのも当然だった。いわれたほうは無表情に「申し訳ありませんでした」と頭を下げている。

いまどき珍しいな、と担任が思ったのは、今や生徒心得を守っているほうが変人扱いされる制服の着方ではなく、その謝り方だ。

腰から折って頭を下げるその姿勢といい、申し訳ありませんという言葉の使い方といい、今時の高校生の謝罪ではない。まるで練達

の営業社員のような、堂に入った謝り方だった。

「次からはちゃんとやってこいよ。できるんだから」

「そうします。ありがとうございます」

そういつてひとつ頭を下げると、わずかに笑みを唇に寄せ、渉己は担任の前から離れていった。そのあたりの呼吸も、雰囲気に残し方も、高校生というよりはずっと大人の空気を感じさせる。単に礼儀正しい子、ということでは片付けられない、余裕ともいふべき雰囲気があった、ように担任には思っていた。

ノートを提出して職員室を出た渉己は、教室に戻って帰り支度をしていた。

そのまま帰る気満々だったが、ここで同級生に捕まった。渉己が意外にすらすると問題を解いていた様子を見ていた同級生が、救いを求めたのだ。

「マジ助けて」

ドルチェ&ガッバーナのコロン、らしき香りを身にまとったその女子は、多分入学以来初めて渉己に話しかけた。渉己が見ると、ノートはほとんど白紙に近い。ひとつもまともに解けていなかった。

「いいよ」

渉己はためらいもせず、気楽にうなずいた。

そこから帰れる状態になるまで1時間かかった。解法がまったくわかっていない同級生に、自分の力で解けるようになるまで指導するのになんてかかったのだが、たかが1時間でそこまで持つていつてしまった、という言い方もできるだろう。

早く帰りたいだけなら、自分で解いて教えてしまえば早かったはずだが、渉己はごく当たり前のように解き方のテクニックを教え、あくまで自分の力で解かせた。

「ちょっと、あたし実は頭いいんじゃないの？」

と同級生が調子に乗っても、渉己は冷笑もせずとがめもせず、にっこりと微笑んだ。

「今頃気付いたの？　これだけ解ければしばらく数学で苦勞しなく

てすむよ」

おもわず同級生が顔を見直してしまうほど、渉己のその顔は魅力的だった。

「あんた、今まで知らなかったけど、すごい奴だね」

「ありがとう」

褒め言葉を軽くかわすように微笑むと、渉己は、今度は本当に帰ることにした。

教室を出て、普通科校舎の昇降口から出て、校門に向けて歩き始めた時に、渉己は事件に巻き込まれることになった。

渉己を巻き込んだのは、それまでまったく渉己と縁が無かった生徒たちだった。

普通科の校舎の昇降口を出て、校内でもっとも大きなグラウンドに向かつて歩いていくと、いずれその左手に校門が見えてくる。

騒動が起きていたのは、その途中にある広場だった。

数人の男子生徒が広場でにらみ合い、怒鳴りあっていた。残念ながらこの高校ではよく見る光景だった。

秦が丘は規模が大きな高校で、特に血の気の多そうな体育科や工業科の生徒を中心に、激しい内部抗争が繰り広げられてきた歴史がある。特進科が名門大学入学者を多数輩出してきた陰で、地域社会も巻き込んだの凄惨な争いが、秦が丘の歴史に血の赤さを加えている。

当然ながら渉己には一切関心が無いようで、その騒ぎを無視して通り過ぎようとしていた。

特徴が無い女子が脇を歩いていったところで、広場にいた男子たちにとって何の意味も無いはずだったが、タイミングが最悪だったといえる。

ボクシング部の一年が数人、中華拳法部の一年が数人、それぞれの因縁で相手を睨みつけていたのだが、それがついに沸点を超えた

ようだった。

延々と繰り広げられてきた抗争劇の中で、いつの間にか定まった最低限のルールというものがある。

たとえば、喧嘩をする場所は他の生徒の邪魔にならないよう選ぶこと。この広場などはルールに従っているといえる。

また、やり過ぎがあれば止められるよう、中立の立会人を入れること。これはルールが守られていない。

これら最低限のルールが守られていない喧嘩はただの喧嘩でしかなく、それでグループの勝敗はつけられないということ。どっちが勝とうと、ルール破りであれば勝ち誇れないし、それどころか制裁の対象になりかねない。

まだ6月に入っただけのこの季節、一年はこのルールが徹底できておらず、上級生に堅く禁じられているルール破りを平気で行ってしまふ部分が、まだまだ残っている。

怒声をあげ、ボクシング部の一人が中華拳法部員の胸を押した。押された方は反射的に反撃に出た。

たちまちのうちに乱闘が始まったのだが、ここまでは渉己には何の関わりもない。

渉己が乱闘を無視して通り過ぎた後、ことは起こった。

乱闘の横を20歩も行きすぎた後だろうか。女子の鋭い悲鳴が上がつていた。

周囲に居合わせた人々や渉己がその声に思わず振り向くと、始まったばかりの喧嘩の渦から、ひと組が漏れ出し、もつれるようにして通路に出ていた。殴ろうとする者と殴られまいとする者が激しくもみ合い、通りがかった女子に衝突していた。

二人の男子に衝突された女子生徒は、吹き飛ばされるようにして路上に倒れた。

それを見て即座に動いたのは、渉己一人だった。

誰もが突然の騒ぎに立ち尽くしている中で、渉己だけがその女子生徒に向かって駆け出していた。

だが、女子生徒を弾き飛ばした二人の男子は、巻き込んだ被害者など無視して、まだもつれるように格闘を続けている。とても女子を助けに入れるような状況ではなかった。

近付けるはずがないその場面に、どう見ても地味以外の表現が見つからない女子が一人、入り込んでいく。

その速度が異常だった。姿勢を低くして、20歩ほどあった距離を一瞬で詰めると、渉己は倒れている女子生徒と格闘している連中との間に割って入るように身をひるがえした。

渉己がその場所にいること自体が異常な出来事だったが、次の瞬間、もつと現実感を喪失するような光景が繰り広げられることになった。

格闘中の男子二人に背を向ける姿勢で勢いよく左足を踏み込むと、ゼロ距離まで迫っていた男子二人が、先ほど自分たちで吹き飛ばした女子よりよほど素晴らしい飛距離で吹き飛んでいた。

左肩を相手に向けて突き出したように見えたが、その渉己の肩が男子二人に当たっていたかどうかは誰にもわからない。それが追えるような動きではなかったし、気がついたら男子二人が宙を舞っていたのだ。

それから倒れこんでいた女子を助け起こす。

「大丈夫？ 立てる？」

幸いにして倒れていた女子は、派手に飛んだ割にはダメージが少なく、パニックに陥ることもなく、苦痛に顔をゆがめながらも立ち上がることができた。

「すぐにここから離れて。誰か、この子を保健室まで連れて行って」
渉己は女子の肩を支えながら、周囲に向かって声を上げた。怒鳴っているという感じはなく、あくまで冷静な、状況を考えれば不思議なほどに落ち着いた声だった。

その声に応じて、金縛りに遭ったようになっていた周囲のうちの2、3人が動いた。立ち上がりはしたものの、まだまっすぐ立てそうにない様子の女子生徒に、次々に助けの手が差し伸べられた。

優しさや義務感からというより、渉己の声に反応してそうとしか動けなかった、という感がある。指示を出した渉己の方は当たり前のように女子生徒を助けを買って出た生徒たちに引き渡している。「しばらくふらふらしていると思うから、気をつけてあげてね」そういつて女子の体から離れると、渉己はくると振り向いた。視線の先に、吹き飛ばされて着地し、どうにか立ち上がろうとしている男子二人と、異常な事態に思わず喧嘩を止めていた他の男子生徒たちがいる。

04 広場の戦い

突然の出来事に呆気にとられていた乱闘中の一年生たちも、吹き飛ばされた二人が立ち上がるあたりで、ようやく事態を把握できなかったらしい。

要するに、彼らは攻撃を受けていた。通りすがりの、地味な少女に。それも、尋常では信じがたいやり方で。

あまりのことに、乱闘を続ける気にもなくなったらしい少年たちは、冷たい目で自分たちを見ている少女に、荒々しい目を向けた。

彼らが何かを叫ぼうとする、その前に、渉己は動き出していた。今度は早くない。

無表情にゆつくりと歩き、路肩の広場に踏み込んでいく。その手は制服のネクタイを外し、右の拳に素早く巻きつけている。

「まだ時間かけようと思ってたけど、まあ、ここで見逃すのも腹立つし、仕方ないか」

ぶつぶつとつぶやいているこの声は、ほとんど誰の耳にも届いていない。

男たちは動けずにいる。渉己の動きが悠然としすぎていて、気を吞まれていたのかもしれない。黙ったままで突っ立っている。なかには、つかみ合った姿勢のままお互いに止まってしまっている者たちもいた。

「私の思惑を崩した責任は取ってもらうよ」

と、渉己が今度ははっきりと聞こえる声でいった。何のことかわかる人間はもちろんいなかったが、その声で一人のボクシング部員が反応した。

「ふざけんじゃ……」

渉己につかみかかろうとしたのは、ボクシング部員にしては体が絞れていない長身の生徒で、たぶん体重にして90キロ前半はかた

い。小柄ではない涉己だが、身長差は20センチ以上、体重差は40キロはあるに違いない。

その巨大な相手に、涉己はすべてをいわせなかった。

ずっと涉己の頭が滑るように動いたように見えたのは、スムーズ過ぎるほどの動きで腰を沈めながら、涉己がその生徒の懷まで踏み込んだからだ。

そして、左足が広場の地面を叩き割るように踏み込み、同時に右の拳がまっすぐにその生徒の腹を撃ち抜いていた。体は彼に対して正面を向いていて、上半身は見事に背が伸びている。打撃の瞬間に手の甲がきちんと下から上に回り、肘の軌道が直線を描く、空手という、堂々たる正拳突きだった。

ボクサーならガードが命のはずだが、つかみかかろうとした時点で、彼にボクシングとしての動きはない。がら空きになった腹部に教科書どおりの正拳が入り、彼はもんどりうつて倒れた。

「ふざけてんのはどつちだ、くそガキ」

打撃と同時に素早く腕を引いた涉己は、冷然と吐き捨てた。そして構えを解いてまっすぐに立ち、広場にいる一年生たちを睥睨した。

「勝手な喧嘩で関係ない女にまで怪我負わせて、冗談で済むとでも思ってるのか」

声に怒気がこもっている。表情は極めて冷たく、地味で平凡そのものだったはずの涉己の存在感が、この時、異常に高まっている。肩から上がる凄気が、街行くチンピラ風情ではびりもしないほどの自信は身に付けているはずの格闘系部員たちに、震え上がらせるほどの迫力を感じさせていた。

「ルールどおりなら、あんたたち全員制裁の対象だぞ。わかってるんだろうな」

睥睨し吐き捨てる涉己の声に、何人かは顔色を変えている。

「今なら見なかったことにしてやる。私が喧嘩をぶち壊したんだから、私が預かる。文句がないなら、とつとと失せろ」

その声をきつかけとして、何人かが動いた。

「行くぞ」

中華拳法部の部員たちだった。

「てめえ、逃げんのかよ」

ボクシング部の一人が煽るが、中華拳法部の部員は取り合おうとしなかった。

「お前らと喧嘩して制裁食らっても仕方ないだろ。部の抗争にでもなつて責任取れるのか？ 上から殺されるぞ？」

「こんなところで心中しても仕方ないだろう。お前らもさっさと消えた方がいいぜ」

一気に毒気が抜けた顔で、それでもボクシング部員に警戒は解かないまま、広場から次々に出て行った。

「チキン野郎が」

と毒づいたのは、残ったボクシング部員の一人で、中華拳法部員たちの後姿につばを吐きかけるような仕草をした後、渉己に体を向けてファイティングポーズをとった。

「とりあえずてめえは殺す」

悪意に満ちた脅しは、だが聞いている渉己にはまるで効果がなかった。

「中拳部はわりと統制が取れてるんだねえ」

と、消えていく背中に感心している。

完全に無視された形のボクシング部員は、その様子で腹立ちが沸点を超えたようで、「シカトしてんじゃねえぞ」と叫びながら、渉己に突進した。

渉己はまるでそちらを見ることもせず、左側面に突進を受ける形になった。何の容赦もない右ストレートが渉己を襲う。

つ、と渉己の体が前後に動く。ごく簡単に渾身の右ストレートを避けていた。

大振りのパンチが当たらなかったことで体が泳いってしまったが、彼はひるまずに次々とパンチを出す。

が、当たらない。

ボクシングスタイルのスウェーバックなら、彼にも避けられる理由はわかる。部内にも天才的な選手がいて、体は大きいのかにかく当てられない。

だが、涉己の避け方はそんな彼の常識を超えていた。なぜ彼女が自分の攻撃を避け続けられるのか、理解できない。初撃を横向きに迎えて避けたこと自体想像の限界を超えた世界の出来事だが、その後の避け方はさらに想像を超えた。

ほとんど動いているようには見えないのに、紙一重のタイミングで避けられていく。

周囲のボクシング部員たちの目の色が変わった。ボクシングとは違う動きだが、涉己のかわし方は、外から見ていても恐ろしいほどに熟練して見えた。

そのうち、飽きた、とでもいったげな表情で大きく後ろに下がった涉己は、無理やり間合いを詰めて撃ち込もうとする部員の左を右手で軽くいなし、踏み込むような仕草もなしに体を彼の懷に滑り込ませ、その距離感のいきなりの変化にのけぞろうとした彼の足を踏んだ。

同時に左ひじが彼のあごを下から正確に撃ち抜いた。

ひじを高く上げて伸びきった、棒立ちにも見えるような、格闘技一般にはありえないような無防備な姿勢になった涉己だが、危険はない。相手は脳を揺らされ、あっけなく倒れこんでいたからだ。

「どうした？ 逃げたやつをチキン呼ばわりしておいて、こんな小娘にやられっぱなしでいるつもりか」

自分を小娘呼ばわりしながら、涉己は他のボクシング部員たちを見た。

彼らはひるんだ。

ひるみつつも、このままでは終われないことも悟っていた。

勝手に喧嘩をして、この高校でのルールを破ったことに自覚はある。それでも勝ちさえすれば後はどうともなるという甘い見込み

で始めたことだったが、この状況はまずいにもほどがある。

ももとの敵を取り逃がしたばかりか、闖入者に、しかもよりによってこんな地味で目立たない女子生徒にいいように仕留められている。

このままで終わっては、ルール破りの上に、部の誇りに泥を塗ることになる。

一人が、顔色を青くして飛びかかる。このグループでリーダー役を自認していた少年だった。今年入学した新入部員の中では最強といわれてもいる。階級はライト級、高校生としては決して小さな部類ではないし、今後を期待される逸材でもあった。

さすがに踏み込みは速く、二度フェイントを入れてからジャブを矢継ぎ早に放ってくる技術も優れていた。足の動きは軽快で、さっきまで部員とは質が違うことが素人目にすらわかる。

だが、相手が悪すぎたのだということに、わずか3秒で人々は気付かざるを得なかった。

渉己は、そのパンチをいちいち手の平で受け止めた。ただ止めるのではなく、すべて自分の外側へと軌道を逃がし、相手の姿勢を細かく崩していく。

まっすぐパンチを撃ちきれない彼がいらだち、間合いを取ろうとしたところで、また渉己の驚くべき速さの踏み込み。

動きに溜めというものがないような、予備動作なしの踏み込みは、一瞬彼女の姿が周囲の者の視界からすら消えるようだった。

彼の左わき腹に、左上半身を下にひねるようにして右を繰り出した渉己の正拳突きがめり込んでいた。あばらの下、ひじでのガードなどまったく間に合わないタイミングだった。

彼はたたらを踏んで体勢を立て直そうとしたが、相手はグローブなしである。まともに入ってしまったえば、ダメージはグローブありの時と比べ物にならない。苦悶の表情でひざを突き、そのままうずくまってしまった。

ギャラリーと化していた周囲の生徒たちが、呆然と見守っている

中、涉己は姿勢を戻しながらため息をついていた。

「これが歴史ある秦が丘高ボクシング部の現実か？ 弱いにもほどがあるな」

セリフがいちいち女子高生のものに聞こえない涉己だが、それが変に似合っているのが涉己という少女の不思議なところだろう。

ボクシング部2年のエース、日比野新がその広場に現れたのは、まさにそのタイミングだった。

3人の一年生が広場の中に倒れこんでいる姿を見て、引っ込みがつかなくなってしまった新が、喧嘩を買い取った拳句に涉己の当て身を食って敗北したのは、前述のとおりである。

05 ボクシング部

渉己の存在は、あつという間に学園全体に知れ渡った。

本人は、新に自分の正体を明かすと、そのまま何事もなかったかのように帰ってしまったのだが、残された人々に渉己が残した印象は、あまりにも強烈過ぎた。

「誰も知らない」

というのが、噂の広まりに拍車をかけた。

本当に渉己のことを誰も知らないわけではなく、もちろん同じクラスや近くのクラスの同級生、同じ中学の出身者などは渉己のことを知っていたが、その「知っている」の程度があまりに低かった。顔を知っている、名前を知っている、一度話したことがある、というレベルでは、情報としてはお話にならない。

「それだけの實力を持っているやつが、今まで完全に無名でいることなんかありうるのか？」

というのが、人々の正直な感想だっただろう。

当然ながら最も衝撃的に渉己の登場を受け止めたのは、渉己に自慢の部員たちをなで斬りにされたボクシング部である。

その日のうちに、事件はボクシング部全体が知る事実になった。

「それで負けたまま帰ってきたのか」

と、三年の部員に責められているのは新だが、新は黙ったままだった。何をいわれても仕方がなかったし、あの負け様は自身あまりにショックで、いすべき言葉も見つからない。もともと言い訳が嫌いな性分でもある。

「俺たちにどんだけ恥かかす気だ、てめえら」

新に蹴りが飛ぶ。リング横の床に正座させられている新は、そのまま横に飛ばされ倒れた。

もともとの原因になった一年生たちは、既にリンチで息も絶え絶えになっている。

「中拳とやり合うのは総力戦になる。てめえら小僧どもが勝手に手を出すなと指示してたよなあ」

三年の怒鳴り声が響き渡り、埒外にいたほかの部員たちも首をすくめた。

今、秦が丘高校内の抗争劇は、格闘系体育部を中心とした割拠状態にある。戦国時代とっていい。だからこそ、簡単に小競り合いなど起こされては困るのである。それが全面的な抗争になれば、お互いに弱ったところを他の部に襲われかねない。

ボクシング部は特に武闘派の一大勢力として、割拠状態の一角を担っている。部員数ではそれほど大きな勢力ではないが、部長以下の戦意や戦闘力が高い。

だからこそ、他の勢力に警戒されている。

ボクシング部のみを潰すために各勢力が手を握ったり、力を削ぎ落とすために他部との抗争を仕組まれたりしてはかなわない。

よくある校内での単純な意地の張り合いと、秦が丘高校内部の抗争とは、質が違いすぎた。秦が丘高校の血の抗争は、大人社会の縮図のように根が深く、入り組んでいる。

簡単に喧嘩騒ぎを起こされては困るのである。

「恥はともかく」

と副部長が新の前にパイプいすを持ち出して話し始めた内容も、単純な話ではない。

「好きに火を焚かれちゃ困るんだよ。ただでさえ空手部や柔道部と微妙になっている状況だ」

バリバリの武闘派である部長に率いられているボクシング部も、この副部長が軍師役として控えているからこそここまで生き残ってこられた、と評価されている。

「応援団も中立を語っちゃいるが、気分しだいでどう出るかわからん。文化部連合が剣道部を口説き落としたのはお前らも知っているだろう」

有名な話だ。

格闘系体育部が校内で激しい争いを繰り広げている中で、それ以外の部は自衛のために連合を組むようになった。その最も大きいものが文化部連合で、喧嘩の腕はなくても、政治力と工作によって格闘系体育部の存在に対抗している。

その文化部連合が、勢力争いには一切参加せず局外中立を徹底していた剣道部をついに口説き落とす、自衛戦力に組み入れたという話は、他の勢力を震撼させた。高い政治力に武力が加わってしまったからだ。

「この危なっかしい状況のときに勝手に喧嘩なんぞやられると、こちの始末が手に負えなくなる。わかるな、新」

充分わかつている。だが新は何もいわずにじつと身を固め、「はい」とのみ返している。下手なことをいえば、副部長はともかく、他三年がかさにかかってリンチを加えてくる可能性がある。正規のスパarringで幾度も上級生を倒している新には、部内に敵も多い。「サッカー部や野球部は相変わらずの傍観主義だけだな、文化部連合のクイーン、あの女のやることだ、もしかしたら球技系まで文化部連合にひきずりこむ可能性も捨てきれない」

聞いていた全員の脳裏に、クイーンと呼ばれる一人の少女の姿が浮かんだ。学園最高の美少女ともいわれる、才色兼備の三年生。数多い文化部を束ねる政治力と、教師をはじめとする学校側からも篤く信頼されているという権威を兼ね備えている。

それだけに、格闘系体育部からは最も警戒されている。

「そうならないために、もうしばらく今の均衡状態は続けたいというのが俺の考えだ」

新はうなずいた。新も同意見だった。単純な力押しだけでは潰されるのが今の秦が丘で、あまりそういうパワーゲームは好まない新でも、絶妙なバランスで成り立っている今の状況の方が、派手な抗争が繰り広げられるよりはいいと思っている。

「なんかいつたか、そいつは」

副部長が声を落として尋ねる。そいつ、というのが、新を一撃で

倒してのけた相手のことだということはずぐにわかる。

「……ボクシング部に正面から喧嘩を売る、と」

「何か背景があるのかもしれないな」

副部長がつぶやく。

「その強さといい、お前がボクシング部だとわかっていてそういい切る辺り、どこかの部の隠し玉かもしれない」

「どこの部だろうと」

と、話に割って入った声がある。背後から降ってきた声に、新は身を縮めた。

「その形で喧嘩を売られれば、買うのが筋だろうな」

ボクシング部部长、名古屋和博である。

「買うのか？」

副部長が尋ねると、名古屋は新の脇を通り、副部長のすぐ隣にあるサンドバッグに手をかけた。

「買わんでどうする？」

傲然とした男だ。背が高く、肩幅も広い。なにより、盛り上がった筋肉は高校生離れしていて、やや猫背のその姿には、他を圧する力感がこもっている。

「なめられたままで終わらせられんだろう」

「均衡状態を崩してまでか？ 新一人犠牲にしても、均衡は守るべきじゃないか？」

名古屋にこんな口がたたけるのは副部長だけで、それを聞いている周囲の部員たちはびくびくしている。他の部員が少しでも名古屋に反論しようものなら、じろりとにらまれて次の瞬間に吹っ飛ばされるのではないか。

「新が売られた喧嘩だ。死ぬ気で勝て」

浅黒い肌の名古屋は、新たにちらりと視線を向けた。底知れないほど冷たい目に、新は全身に寒気が走った。負ければ命はない、ということだ。

「そいつがどんなバックを持ってようが、そいつにだけは最低限勝

たねえと、かえって均衡に飲まれて立場がなくなるだろうが」

「それはそうだ」

名古屋が他の部から蛇蝎のごとく嫌われているのは、狂犬呼ばわりされるほどの喧嘩屋であるくせに、政治的な頭も働き、自分の口で説明もできるということだ。ただの格闘馬鹿にできることではない。

「新で始末がつかんようなら」

名古屋はぐつと拳を握りこみ、サンドバッグをひとつたたく。天井から吊るされているサンドバッグは、鎖が派手な音を立てて鳴り、名古屋以外に叩かれたときには決して見られないような動きで宙を泳いだ。

「俺が出る。背後に何部がようと、どうせつまらん連中だ。少なくとも中拳や柔道部じゃねえだろう。援団ならもつとありえねえ話だしな」

大きく揺れるサンドバッグを両手で止め、名古屋は今まで他部との抗争を共に戦ってきた戦友でもある副部長を見た。

「正面から喧嘩を売るとかいつてる小娘だ。正面から叩き潰してやる」

「女をやるのか？」

副部長があえて無表情を装って尋ねる。名古屋の答えは明快だった。

「敵に男女はねえだろう、少なくとも喧嘩の場ではな」

やる気だ、と、名古屋を知るすべての人間が確信するだろう。笑いもせずという名古屋の口調は淡々としていた。

06 女王陛下の執務室

日が長いから、弓道部の練習を終えた奈乃香が、シャワーまで浴びて出ても、まだ外には夕暮れの気配は薄かった。

暑いな、と奈乃香はわずかに肌を湿らせる汗を不快に感じた。昔から暑いのは苦手だった。

あまりだらだら長く練習したりしない奈乃香が、その日の練習を終えて着替えに戻ろうとしたとき、事件を耳にした。なんでも、凶暴さでは空手部と並んでトップクラスのボクシング部員が、中拳部に喧嘩を吹っつけた拳句、通りがかりの女子生徒に一撃で敗れ去ったという。しかも、誰もその偉業の主を把握しきれず、正体がわからないらしい。

奈乃香は、興奮して話す部員の声を耳にしながら、興味無さ気に聞き流している。

美しい少女だ。

長い髪を、部活の間は一本にまとめているが、終わればほどいてしまう。しっとりとした黒髪が、シャワー上がりの今は少し湿り気を帯びていて、品のいい色気のようなものを感じさせる。

顔立ち自体は17歳らしい幼さを残した造形なのに、雰囲気が高校生らしくないほどに落ち着いているからか、ときにひどく大人っぽく見える。

「奈乃香様もお気を付け下さいね」

髪にくしを入れ終え、荷物を持って立ち上がろうとしたときに、そんな声がかかった。奈乃香は苦笑する。

「様はやめてといっているでしょう」

奈乃香の大ファンを公言する下級生は、しまった、とでもいいたげに舌を出した。普段から会話の中で奈乃香の名を出す時、様を付ける女子がいる。この下級生一人の話ではなく、その数は三桁にも達するだろう。

「文化部連合の導き手ですもの、おかしな考えで近づく者だって、いないとは限りませんわ」

言葉の使い方が大時代的で、奈乃香にはおかしくて仕方ないのだが、本人は大真面目だ。そういう芝居がかった空気が似合ってしまったような雰囲気、確かに奈乃香にはある。

「忠告ありがとう。気を付けておくわ」

笑顔でかわすと、奈乃香はそのまま手を軽く振って部室を出た。

出ると、その扉のすぐ前に木刀を持った女子生徒が三人、扉を守るように背を向けて立っている。今度、新しく文化部連合の組織に加わった剣道部の有志だ。つい最近から奈乃香の護衛役を買って出ている。

「お待ちせしました」

奈乃香が声をかけると、全員、背筋を伸ばした。

「会長、お疲れ様です！」

体育会系、というより、これも大時代的なあいさつだった。これではまるで極道の姐さんか女將軍か、というところだ。

疲れるなあ、というような顔を一瞬見せた奈乃香だが、すぐに気を取り直した。

「さ、行きましょう」

この、大人っぽくはあってもはかなげなほどに華奢な少女が、実は学園でもっとも強い権力を握っている女だということは、なかなか外見からは想像がつかないだろう。

奈乃香は、正式には文化系部活動連合会という「文化部連合」の会長という立場にある。この学校で会長と呼ばれる人間は、生徒会長と奈乃香の二人に限られるが、出たがりという以外に特徴に欠ける生徒会長より、奈乃香の方に「会長」という呼び名が定着している。

「クイーン」とか「女王」という呼び名でも呼ばれる。

以前は「姫」と呼ばれることが多かったのだが、文化部連合の頂点に立って以来、そう呼ぶ者はいなくなった。自分が姫という柄だ

とは微塵も思わない奈乃香だから、まだしも「会長」の方がましだと受け入れている。

本来、弓道部は体育会系だから、奈乃香が文化部連合のメンバーに入っているのは不自然なのだが、弱小体育部のいくつかは昔から文化部と一緒に行動してきた歴史がある。

文化部連合は、元は組織と呼べるほどのものではなく、主な体育部より活動が目立たず予算も少ない中でどうにかやりくりしているという、涙ぐましい努力をするための連絡会だった。

それが、ここ数年、格闘系体育部間の抗争が激化するに従い、その派閥争いに巻き込まれる例が増えてきた。中には脅されて使い走りさせられたために、別の部の襲撃を受けて壊滅、そのまま消えてしまった文化部もある。

武力としてはごく弱いのが宿命である文化部は、大同団結して格闘系体育部の脅威に備えるしかなかった。そうして大組織に生まれ変わったのが文化部連合で、奈乃香はそれをさらに進め、大改革した指導者だった。

文化部連合が事務局として使っているのは、文化部の部室が集合している「文化部棟」の端にある一室。昔は囲碁部があった部屋だが、マンガから来たという囲碁ブームの時に、部屋が手狭になったため囲碁部が別の部屋に移り、以来空き部屋になっていた。

奈乃香が文化部連合に入るまではずいぶん殺伐とした部屋で、使い古した書類ロッカーと、処分寸前の長テーブル、座るのに一瞬ためらうようなパイプいすが並ぶだけだったが、最近はずっかり様相を変えている。

それにしても、と奈乃香は思う。

来るたびに思うのだが、なぜここまで気合が入っているのだろうか。去年の夏休み明けのこと、有志が寄付金を集め、あるいは自身のバイト代を投じて、事務局の大改装を行ったのだが、学校側からなかなか資金が出ずに扉までぼろだった事務局は、校長室より豪勢といわれる姿に変貌している。

まず、扉は引き戸から観音開きの分厚い木製の物に付け替えられた。それも、ただの合板張りではなく、檜の一枚板という豪勢さ。ところどころに浮き彫りの細工までしてある。扉交換を請け負った者の本当の希望はマホガニー製だったらしいが、それはさすがに難しかったらしい。

それを開くと、中はそう広くはないが、高校の部室とは思えない状態になっている。もとの床がリノリウムだったのに、深いエンジ色の絨毯敷きになっている時点で、奈乃香の感覚では常軌を逸している。

会議用のテーブルにはそれぞれLANケーブルが設置され、そのままノートPCを持ち込んでネットにつなげるようになっていて、いすはどれも肘掛けつきの軽量ビジネスチェア。その横にあるソファは北欧製の白い合皮張り、ソファの向かい側にある棚にはエスプレッソマシンまで備わっている。

会長用のデスクはもちろんスチール事務卓などではなく、小さいながらも重厚な木製デスク。よくドラマなどで見る重役デスクそのものだ。

これはさすがにひどすぎる、と交換を申し出た奈乃香に、現実は冷たかった。残念ながら事務局は狭すぎ、会長用のデスクとして使う以外に置き場所もなかったのだ。

しかたなく、彼女はそのデスクに座ることを受け入れたのだが、これがあまりにも似合いすぎた。小柄ではないにしても華奢な少女が座れば、普通はデスクの重厚さに負けてひどく小さく見えそうなものだが、高校生離れた落ち着きでデスクに座り、各種案件を処理していく奈乃香の姿は、はまりすぎていた。

「女王陛下の執務室」

事務局がそう呼ばれるようになるまで、時間はかからなかった。

その「執務室」に「女王陛下」が入ると、中には数人のスタッフがいた。女子が多い。

「お疲れ様です、会長」

6月に入って衣替えになっても、なぜかジャケットを着ている集団が、声をそろえてあいさつした。俗にいう「女王陛下の親衛隊」だ。この学校の制服は黒ベースなのだが、靴下もひざ上丈の黒、靴は黒の革靴、茶髪禁止で統一している。

そもそも秦が丘高校では冬以外にジャケットを着る習慣を持っていること自体珍しいのだが、この集団はジャケットだけでなく、沈んだ朱の地に黒系で行書体の「文化部連合」を刺繍した腕章までしている。

これなどは奈乃香が頼むからやめてくれと懇願したのだが、この手の趣味は一度暴走すると手が付けられないものだ。逆にこれだけは認めてくれと泣きに泣かれてしまい、仕方なく認めたところ、年度が替わると新入生まで加わって一大勢力になってしまっている。

「お疲れ様」

いったい私は何者なんだろうね、と思いつつ、奈乃香は優雅なほどの微笑を浮かべ、親衛隊のあいさつに答えた。

デスクに座り、出費の決済でもしようかと書類の束を目の前に置いた奈乃香の横に、スタッフが立つ。秘書役を自ら任じている生徒だ。

「会長、お聞きになりましたか」

「なにを？」

秘書役の声がかたい。何をいおうしているか見当はつくが、詳しいことを知っているわけでもないから、知ったかぶりせずに聞き返す。

話はやはり、ボクシング部の乱闘と突然現れた少女の話だった。

「ボクシング部は明日にも総動員体制で相手を追い込む見込みです」
一通りの経緯の説明の後、秘書役はそう付け加えた。

「総がかりで？」

「もちろん総がかりではなく、日比野が再戦を挑むという形ですが、目撃者の話をまとめると、日比野の勝利の目は薄いのではないかと」
「彼が負けたら総がかりでリンチ、というわけでもないでしょう」

「名古屋が出る、そうですね」

「ふうん」

奈乃香は決済待ちになっている書類の束を片付けながら聞いている。あまり興味もなさそうに見えるが、喧嘩に名古屋が出てくる、というのは気になるようで、わずかに眉が動いた。

報告します、という声が割り込んできて、別の親衛隊員が机をはさんだ正面に立った。

「相手の正体がわかりました」

部屋中の視線が集まる。

「普通科一年A組、岩崎涉己。秦が丘2中出身です。部活動には所属していません。同中出身者にも確認しましたが、非常に目立たない生徒というのが結論です。格闘技経験も確認できませんでした」
「そんなわけないでしょう。いったい何人倒したと思っているの」
秘書役がいうと、報告者は気弱な表情になりつつ答える。

「情報がとても少ない生徒です。交友関係も広くありませんし、中学時代にもこれといって大きなエピソードは確認できていません」

「調べが足りないんじゃないの？ もっときちんと調べなさい」

「短い間でよく調べてくれたわ。ありがとう」

と、奈乃香は秘書役とは逆のことを口にした。報告者は救われたような顔をし、秘書役は半歩下がって一礼した。

「引き続き調査していけばいいことだわ。その手配を」

奈乃香が指示を出し、秘書役はもう一度お辞儀した。不満そうな顔はしていない。厳しいことをいって組織を引き締めるのが自分の役割と覚悟しているのだろう。そのように奈乃香が仕込んだ。秘書役を買って出るのなら、そこまで徹底して私を助けなさい、と。

「バランス・オブ・パワーの維持は至上命題よ。秩序を乱す因子は早く摘み取っておくべきだわ。皆もこの件に関する各部の動向を注視しておいてちょうだい」

奈乃香がいうと、親衛隊員をはじめとするスタッフが全員立ち上がり、はい、と返事をした。

大した統率力なこと、と心の中で奈乃香が自嘲したことまで気付いた者はいなかった。

07 矢木澤家の夜

日が長いから、弓道部の練習を終えた奈乃香が、シャワーまで浴びて出ても、まだ外には夕暮れの気配は薄かった。

暑いな、と奈乃香はわずかに肌を湿らせる汗を不快に感じた。昔から暑いのは苦手だった。

あまりだらだら長く練習したりしない奈乃香が、その日の練習を終えて着替えに戻ろうとしたとき、事件を耳にした。なんでも、凶暴さでは空手部と並んでトップクラスのボクシング部員が、中拳部に喧嘩を吹っつけた拳句、通りがかりの女子生徒に一撃で敗れ去ったという。しかも、誰もその偉業の主を把握しきれず、正体がわからないらしい。

奈乃香は、興奮して話す部員の声を耳にしながら、興味無さ気に聞き流している。

美しい少女だ。

長い髪を、部活の間は一本にまとめているが、終わればほどいてしまう。しっとりとした黒髪が、シャワー上がりの今は少し湿り気を帯びていて、品のいい色気のようなものを感じさせる。

顔立ち自体は17歳らしい幼さを残した造形なのに、雰囲気が高校生らしくないほどに落ち着いているからか、ときにひどく大人っぽく見える。

「奈乃香様もお気を付け下さいね」

髪にくしを入れ終え、荷物を持って立ち上がろうとしたときに、そんな声がかかった。奈乃香は苦笑する。

「様はやめてといっているでしょう」

奈乃香の大ファンを公言する下級生は、しまった、とでもいいたげに舌を出した。普段から会話の中で奈乃香の名を出す時、様を付ける女子がいる。この下級生一人の話ではなく、その数は三桁にも達するだろう。

「文化部連合の導き手ですもの、おかしな考えで近づく者だって、いないとは限りませんわ」

言葉の使い方が大時代的で、奈乃香にはおかしくて仕方ないのだが、本人は大真面目だ。そういう芝居がかった空気が似合ってしまうような雰囲気、確かに奈乃香にはある。

「忠告ありがとう。気を付けておくわ」

笑顔でかわすと、奈乃香はそのまま手を軽く振って部室を出た。

出ると、その扉のすぐ前に木刀を持った女子生徒が三人、扉を守るように背を向けて立っている。今度、新しく文化部連合の組織に加わった剣道部の有志だ。つい最近から奈乃香の護衛役を買って出ている。

「お待ちせしました」

奈乃香が声をかけると、全員、背筋を伸ばした。

「会長、お疲れ様です！」

体育会系、というより、これも大時代的なあいさつだった。これではまるで極道の姐さんか女將軍か、というところだ。

疲れるなあ、というような顔を一瞬見せた奈乃香だが、すぐに気を取り直した。

「さ、行きましょう」

この、大人っぽくはあってもはかなげなほどに華奢な少女が、実は学園でもっとも強い権力を握っている女だということは、なかなか外見からは想像がつかないだろう。

奈乃香は、正式には文化系部活動連合会という「文化部連合」の会長という立場にある。この学校で会長と呼ばれる人間は、生徒会長と奈乃香の二人に限られるが、出たがりという以外に特徴に欠ける生徒会長より、奈乃香の方に「会長」という呼び名が定着している。

「クイーン」とか「女王」という呼び名でも呼ばれる。

以前は「姫」と呼ばれることが多かったのだが、文化部連合の頂点に立って以来、そう呼ぶ者はいなくなった。自分が姫という柄だ

とは微塵も思わない奈乃香だから、まだしも「会長」の方がましだと受け入れている。

本来、弓道部は体育会系だから、奈乃香が文化部連合のメンバーに入っているのは不自然なのだが、弱小体育部のいくつかは昔から文化部と一緒に行動してきた歴史がある。

文化部連合は、元は組織と呼べるほどのものではなく、主な体育部より活動が目立たず予算も少ない中でどうにかやりくりしているという、涙ぐましい努力をするための連絡会だった。

それが、ここ数年、格闘系体育部間の抗争が激化するに従い、その派閥争いに巻き込まれる例が増えてきた。中には脅されて使い走りさせられたために、別の部の襲撃を受けて壊滅、そのまま消えてしまった文化部もある。

武力としてはごく弱いのが宿命である文化部は、大同団結して格闘系体育部の脅威に備えるしかなかった。そうして大組織に生まれ変わったのが文化部連合で、奈乃香はそれをさらに進め、大改革した指導者だった。

文化部連合が事務局として使っているのは、文化部の部室が集合している「文化部棟」の端にある一室。昔は囲碁部があった部屋だが、マンガから来たという囲碁ブームの時に、部屋が手狭になったため囲碁部が別の部屋に移り、以来空き部屋になっていた。

奈乃香が文化部連合に入るまではずいぶん殺伐とした部屋で、使い古した書類ロッカーと、処分寸前の長テーブル、座るのに一瞬ためらうようなパイプいすが並ぶだけだったが、最近はずっかり様相を変えている。

それにしても、と奈乃香は思う。

来るたびに思うのだが、なぜここまで気合が入っているのだろうか。去年の夏休み明けのこと、有志が寄付金を集め、あるいは自身のバイト代を投じて、事務局の大改装を行ったのだが、学校側からなかなか資金が出ずに扉までぼろぼろだった事務局は、校長室より豪勢といわれる姿に変貌している。

まず、扉は引き戸から観音開きの分厚い木製の物に付け替えられた。それも、ただの合板張りではなく、檜の一枚板という豪勢さ。ところどころに浮き彫りの細工までしてある。扉交換を請け負った者の本当の希望はマホガニー製だったらしいが、それはさすがに難しかったらしい。

それを開くと、中はそう広くはないが、高校の部室とは思えない状態になっている。もとの床がリノリウムだったのに、深いエンジ色の絨毯敷きになっている時点で、奈乃香の感覚では常軌を逸している。

会議用のテーブルにはそれぞれLANケーブルが設置され、そのままノートPCを持ち込んでネットにつなげるようになっていて、いすはどれも肘掛けつきの軽量ビジネスチェア。その横にあるソファは北欧製の白い合皮張り、ソファの向かい側にある棚にはエスプレッソマシンまで備わっている。

会長用のデスクはもちろんスチール事務卓などではなく、小さいながらも重厚な木製デスク。よくドラマなどで見る重役デスクそのものだ。

これはさすがにひどすぎる、と交換を申し出た奈乃香に、現実は冷たかった。残念ながら事務局は狭すぎ、会長用のデスクとして使う以外に置き場所もなかったのだ。

しかたなく、彼女はそのデスクに座ることを受け入れたのだが、これがあまりにも似合いすぎた。小柄ではないにしても華奢な少女が座れば、普通はデスクの重厚さに負けてひどく小さく見えそうなものだが、高校生離れた落ち着きでデスクに座り、各種案件を処理していく奈乃香の姿は、はまりすぎていた。

「女王陛下の執務室」

事務局がそう呼ばれるようになるまで、時間はかからなかった。

その「執務室」に「女王陛下」が入ると、中には数人のスタッフがいた。女子が多い。

「お疲れ様です、会長」

6月に入って衣替えになっても、なぜかジャケットを着ている集団が、声をそろえてあいさつした。俗にいう「女王陛下の親衛隊」だ。この学校の制服は黒ベースなのだが、靴下もひざ上丈の黒、靴は黒の革靴、茶髪禁止で統一している。

そもそも秦が丘高校では冬以外にジャケットを着る習慣を持っていること自体珍しいのだが、この集団はジャケットだけでなく、沈んだ朱の地に黒系で行書体の「文化部連合」を刺繍した腕章までしている。

これなどは奈乃香が頼むからやめてくれと懇願したのだが、この手の趣味は一度暴走すると手が付けられないものだ。逆にこれだけは認めてくれと泣きに泣かれてしまい、仕方なく認めたところ、年度が替わると新入生まで加わって一大勢力になってしまっている。

「お疲れ様」

いったい私は何者なんだろうね、と思いつつ、奈乃香は優雅なほどの微笑を浮かべ、親衛隊のあいさつに答えた。

デスクに座り、出費の決済でもしようかと書類の束を目の前に置いた奈乃香の横に、スタッフが立つ。秘書役を自ら任じている生徒だ。

「会長、お聞きになりましたか」

「なにを？」

秘書役の声がかたい。何をいおうしているか見当はつくが、詳しいことを知っているわけでもないから、知ったかぶりせずに聞き返す。

話はやはり、ボクシング部の乱闘と突然現れた少女の話だった。

「ボクシング部は明日にも総動員体制で相手を追い込む見込みです」
一通りの経緯の説明の後、秘書役はそう付け加えた。

「総がかりで？」

「もちろん総がかりではなく、日比野が再戦を挑むという形ですが、目撃者の話をまとめると、日比野の勝利の目は薄いのではないかと」
「彼が負けたら総がかりでリンチ、というわけでもないでしょう」

「名古屋が出る、そうですね」

「ふうん」

奈乃香は決済待ちになっている書類の束を片付けながら聞いている。あまり興味もなさそうに見えるが、喧嘩に名古屋が出てくる、というのは気になるようで、わずかに眉が動いた。

報告します、という声が割り込んできて、別の親衛隊員が机をはさんだ正面に立った。

「相手の正体がわかりました」

部屋中の視線が集まる。

「普通科一年A組、岩崎涉己。秦が丘2中出身です。部活動には所属していません。同中出身者にも確認しましたが、非常に目立たない生徒というのが結論です。格闘技経験も確認できませんでした」
「そんなわけないでしょう。いったい何人倒したと思っているの」
秘書役がいうと、報告者は気弱な表情になりつつ答える。

「情報がとても少ない生徒です。交友関係も広くありませんし、中学時代にもこれといって大きなエピソードは確認できていません」

「調べが足りないんじゃないの？ もっときちんと調べなさい」

「短い間でよく調べてくれたわ。ありがとう」

と、奈乃香は秘書役とは逆のことを口にした。報告者は救われたような顔をし、秘書役は半歩下がって一礼した。

「引き続き調査していけばいいことだわ。その手配を」

奈乃香が指示を出し、秘書役はもう一度お辞儀した。不満そうな顔はしていない。厳しいことをいって組織を引き締めるのが自分の役割と覚悟しているのだろう。そのように奈乃香が仕込んだ。秘書役を買って出るのなら、そこまで徹底して私を助けなさい、と。

「バランス・オブ・パワーの維持は至上命題よ。秩序を乱す因子は早く摘み取っておくべきだわ。皆もこの件に関する各部の動向を注視しておいてちょうだい」

奈乃香がいうと、親衛隊員をはじめとするスタッフが全員立ち上がり、はい、と返事をした。

大した統率力なこと、と心の中で奈乃香が自嘲したことまで気付いた者はいなかった。

08 岩崎家の朝

岩崎家は秦が丘地域のご真ん中に位置する。といっても、栄えている地区というわけではなく、比較的栄えている南部地域に面した住宅街の一画。

戦後の高度経済成長期に町づくりが行われた秦が丘は、新旧さまざまな住宅が入り乱れている。岩崎家はそんな中でも、再開発がバブル期前後に改めて行われた地区にある。涉己いわく「中途半端な再開発のおかげでかえって混乱している」。

なるほど、混乱している、と今更ながら隆治は思う。

朝7時の岩崎家近辺は、それほど静かではない。古い住宅から出てくる老人たちにとっては、あるいは一日で最も活発な時間であるかもしれないし、新しい住宅から出てくる人々にとってはそろそろ通勤通学の時間帯でもある。

そんな中で町づくりの混乱を感じるのは、まず道だ。

秦が丘はそれほど坂が多い地域ではなく、起伏に乏しい。だが戦前はほとんどが農地か林だったという地域だけに、一気に開発を行わなかった代償として、昔からの道の形が生き残ってしまっている。うねうねとした道や小川の形を今に残している街路は、車の通行には適していないし、道幅が狭いから歩行者にも優しくない。

朝の町角では、車がうねうねした道を徐行し、垣根から伸びた枝を避けて通る歩行者や自転車の姿がよく見られる。

もっとも、そういう辺りが、あまりにも人工的な無機質さに走った都市よりもずっといい、という意見もある。

開発が幾度かに分かれて行われた代償として土地問題が頻発してきているようだが、さすがにその辺りは隆治の知ったことではない。

高校生の手には余る。

岩崎家はそんな地区の、やや入り組んだ道の奥にある。初めて岩崎を訪れる人間は、間違いなく迷うだろう。また周囲の家々がよ

く似通った形をしていて、その上「岩崎」姓の家が、同じ町内に4軒もある。血縁にあるのは2軒だけで、渉己の家とその他の家に血のつながりは一切無い。

建物は矢木澤家の借家とどっこの古きで、渉己によれば「旧耐震基準すら満たしてないから、地震があったら葬式は任せた」ということらしい。木造2階建て、小ぶりな庭があつてそこにいつも犬が寝そべっている。

「あ、りゅうちゃん」

目ざとく隆治を発見したのは、岩崎家の次女、夏己なつきだった。ちょうど、飼い犬の朝の散歩から戻ってきたところらしく、顔が上気している。

「よう。元気か」

「元気だよー。りゅうちゃんはいろいろ大変そうだねー」

「まあ、お前んとこの怪獣のおかげでな」

「聞こえたらしばかれるよ」

「聞こえないだろう。まだロードワーク中だろ？」

「もう帰ってくるタイミングだけだね……っていったところで帰ってきたよ」

2歳違いの夏己は、隆治や美紀にとっても妹のようなもので、お互い遠慮も隔意もない。

夏己が自分の背後を示したから、隆治は振り返った。渉己が、ちょうど角を曲がってくるところだった。

「お」

という顔をした渉己だが、なぜ隆治が自宅の前にいるかはすぐに見当がついたらしい。

「おつとめご苦労っ」とだけ言い残して隆治や夏己の横を通り抜け、そのまま家に入っていた。

「いいご身分だねー」

柴の血が入った雑種の犬をわしわしと両手でなぜながら、夏己がいう。

「まったくだ。何様だよ」

と隆治も口では応じるが、別に本気でそう思っているわけではないし、夏己もそれはわかっている。

「シャワー浴びて着替えて出てくるまで15分コースだねー。中で待つてれば？」

「そうするか」

「あたしも着替えないと」

夏己が立ち上がる。姉は160センチ強あるが、妹は150センチに満たない。まだまだ成長期を抜けたわけではないが、最近その背の低さを気に始めている。顔立ちは間違いなく姉よりかわいらしさと勝っていて、隆治が客観的に見ても、地味が服を着て歩いているような渉己よりは、異性同性問わず人気があるはずだ。

もっとも、渉己も別に顔立ちが悪いわけではない。隆治などはあまりにも見慣れすぎていて普段は気付かないが、顔の作りそのものは決して悪くない。問題は、せつかくの素材を長年かけて潰し続けてきた実績にある。地味で目立たない子供であるために、渉己は子供とは思えないような努力を傾け続けてきた。

「佳苗ちゃんどう？ 部活慣れたっぽい？」

「まだだなあ。部には慣れたみたいだけど、何しろ体力が追いつかない」

「お姉やりゆうちんみたいに体鍛えてないもんねー」

「あの怪物と同列に語られたらかなわんわけだが」

「よくいうよー、同レベルで体力勝負できるの、りゆうちんだけだつてその怪物がいつてたよー」

「信じるな、そんな与太話」

話をしながら家に入っていく。

玄関から上がっていくと、見慣れた風景である。小学生時代から、美紀や妹弟と何度この家を訪問したかわからない。

「おお、どうした隆治」

トイレから出てきて顔を合わせたのは、岩崎家の父である。

「護衛。涉己の」

「護衛？ あいつを？ あの核弾頭に手足が生えたような奴を護衛？ 何の冗談？」

「娘の父親とは思えないセリフですね」

「俺はあいつを女に生んだ覚えはないからな」

「ひでえ父親だよ」

いい加減家族ぐるみもいいところの付き合いで、こちらも遠慮や隔意は毛頭無い。

「飯は食ったのか？ と、お前に聞くのは野暮だった」

と、岩崎父は尋ねておいて自分で結論を出してしまった。隆治が矢木澤家の一家を預かる主夫だということは、知りすぎるほど知っている。

「まあ、茶くらいしばいとけ。おい、茶だ、茶」

「あら、お早う隆治君」

父に呼ばれて台所から顔を出したのは岩崎母で、こちらは岩崎父以上に隆治や美紀を知り尽くしている。

「あのけだもののお守り？ 大変ねえ」

「ついに母親からけだもの呼ばわりか」

隆治が苦笑すると、夏己がまつわりついてきた。

「昨日の夜ねー、美紀ちゃんにしこたま怒られて『きiiiiiiiiつて叫んだからねー、その叫び声にちなんで今朝から『けだもの』になっちゃったんだよー」

「それはそれは」

なおさら苦笑せざるを得ない。

「お茶はほうじ茶だけどいい？」

「ああ、お構いなく」

「別に構ってやしないわ、けだものが出てくるまでの待ち賃よ」

岩崎母が笑う。

「そんなにすごい雄叫びだったのか？」

「うーん、少なくとも熟睡中のあたしが起きるくらいだから、結構

すごかったんじゃないかなー」

「夏己が起きたのか。そりやすげえ」

「むー、どーという意味よー」

「聞いた通りでそれ以上の意味はないぞ」

「最近のりゆうちゃんまいきー」

「昔の俺はどんなだったんだよ」

「もっと素直でー、あたしのいうことも何で聞いてくれてー、お小遣いとかもバンバンくれてー」

「ちよつと待て、いつ俺がそんな素敵星人になった」

「夏己、あんた隆治君の相手してていいの？ そろそろ時間だとかいつてなかった？」

「ほら、時間がお前を呼んでるぞ。とつと行つて来い」

「むー、あたしなんかいないほうがいいんだね、りゆうちゃんは」

「その微妙な取り違いはやめろ、会話が終わらんから」

無駄話をしているうちに時間は過ぎ、夏己が着替えの前に手を洗おうと洗面室に消えた後、すぐにその姉が姿を現した。シャワーを浴び終えた髪は拭きが甘いようで、小さな水滴が落ちている。

「早く乾かしてこいよ、てかもつとちゃんと拭け」

「なによ、母親みたいなこといわないでよ」

渉己は渋い顔をしている。

「いわせてるのは誰だ」

「いえと頼んじやいないわ」

「屁理屈こねてないでとつと拭いてこい」

「へえへえ」

渉己はぶーたれながら洗面所に向かった。行き会った夏己の「けだものが来たー」という声が聞こえる。

「さすが隆治君ね、渉己のあしらいがうまいこと」

「そりゃこんなこと10年も繰り返してればね」

まったく長い付き合いだ。

09 通学路

居間でほうじ茶をすすっていると、そのうち涉己が制服姿で現れた。今日も完璧なまでの地味。

「今日は天気良さそうだな」

天気予報を見ながらいうと、涉己は「そう」と短く答えて居間から出て行った。隆治は茶碗を岩崎母に返し、短く礼をいって涉己を追った。

玄関で靴を履き終えたまま待つていた涉己と並んで歩き出す。

「事情は聞いてる？」

「大体はな」

「まあ、そういうことになったから」

涉己の話はきわめて短い。お互い、いずれこうなることを見越して散々シミュレートしてきている。いまさらいすべきことはなかった。細部の打ち合わせを行うだけだ。

「とりあえず当初の計画通り、ボクシング部から始められたから、結果オーライだわ」

「美紀は自分に話が無かったって大騒ぎだけだな」

「それだけが誤算だったわ、まじで」

「そうとうすげえ説教食らったらしいな。いや、説教ってよりや、愚痴か」

「……かすかにきれいな川の景色が見えなかったのは事実ね」

さすがに涉己はうんざりした顔をしている。同性でも、同性の愚痴には閉口するらしい。しかも原因が自分の行動とあっては。

「まずは二年の日比野を叩く。出来るだけ速やかに名古屋を引きずり出して、流れを作る必要があるからね」

気を取り直す、という意図の下か、涉己は口調を改めた。隆治はうなずく。

「日比野先輩を倒せば黙っててもあの『恐竜』は出てくるだろう」

「ただ出てくるだけじゃだめ。多少根回ししてでも正規の形まで持つていく必要がある」

「まあ、好きにすりゃいいさ」

「うん、好きにする」

「兵隊は必要か？」

「護衛がいれば充分。自分の手が届かない範囲に手を伸ばさなければ、兵隊は必要ない」

「じゃあ俺は護衛に専念ってことで」

「よろしく」

二人の会話は常にテンポが良く、あまり無駄な話が無い。

「たぶんボクシング部の連中がこの辺りまで出向いて処断ってことにはならないわね」

「ふうん。根拠は？」

「名古屋が嫌うからよ。あの武闘派が、こそこそ闇討ちなんてこと考えるはずないじゃない」

「まあなあ」

「だから自宅から護衛の必要は無いわよ」

「それを美紀に提案できるか？」

「……しばらく迷惑かけるわね」

「賢明だな」

のんきな顔と声で話しているから、その内容が結構物騒な話であることに、すれ違う人々は気付かない。

「今日から校内の有名人だ」

隆治がいうと、涉己は表情の乏しい顔に、というより今までは表情を乏しくしていた顔に、さらにうんざりという成分を加えた。

「仕方ないわね」

「覚悟は決めたか？」

隆治は微笑している。この幼馴染がどれだけ地味な自分の立場に安住してきたか、隆治は良く知っている。

「いまさら覚悟もなにもないでしょ、状況は始まっちゃってるんだ

から」

「始まつたんじゃなくて、始めたんだろ」

「あんたや美紀みたいに、顔で勝負できるキャラでもないしね。地で行くわよ」

涉己は隆治の突っ込みにまったく反応せずにいった。目立つ存在になることについては、意外にてんぱっているらしい。

「美紀はお前が美女だと信じ続けてるけどな」

「あれの美的感覚は根本的に崩れてるからね」

「崩れてなんかないわよ」

いきなり横から美紀が出てきて、二人ともやや驚いた。いつものらこんなところで会うはずがなかった。

「お、お早う」

「お早う、しょうちゃん」

相変わらずきれいな顔である。初夏というにはもう強すぎる朝の日差しの中で、色素の薄い髪がきらきらと輝いている。ちよつと感動的なほどの美しさなのだが、あいにくそばにいる二人は彼女の美に慣れすぎていた。

「もう少し自覚を持ってほしいわね。しょうちゃんは自分で思ってる10倍は美人さんなんだから」

顔がかなりむっとしていている。寝不足のせいもあるのだろうか。

「それはいい過ぎ」

「異論は認めません」

涉己のボソツとした反論にぴしゃつと答えると、美紀は隆治を見た。

「噂がすごいことになってるわ。しょうちゃんの正体ももう回つてると見ていいと思う」

「まあ、隠し通せるものでもないしな」

「ボクシング部もそうだけど、情報集めてて怖いなって思ったのは、文化部連合のはねっかえりね。自分が正義だと思ってる人も多いから、行動が極端になりがちだわ」

「テロリストみたいなものか。気をつけとく」

「そうして」

ずんずん歩きながら、美紀がいう。二人はそのペースについていきつつ、顔を見合わせた。

「私たちも相当目立つはずだから、人の応対には気をつけてね。そっちに気をとられて、しょうちゃんへの注意を怠らないように」

「わかってるよ」

「あんたたちはもともとかなり目立ってたと思うぞ」

渉己がまたボソツという。どうもかなり美紀に気後れを感じているらしい。

「美紀は目立ってるな、確かに」

一方隆治は気楽なもので、美紀がむっとしていたところで、さして気にもならないらしい。

「茶化さないで。今度は目立ち方がまるで違うわ」

「それもわかってるって」

美紀は確かに相当目立っている。隆治もそこそこ目立つ存在。だが、渉己が引き起こしたこの事態の後では、目立ち方の性質がまるで違うものになる。

三人は、ボクシング部と真正面から抗争を起こそうとしているのだ。格闘系体育部と文化部連合という巨大勢力が均衡し、バランス・オブ・パワーと呼ばれる表面的な平和が保たれている状態の中で、まったくの新興勢力として派手なデビューを飾った渉己たちに、逆風が吹かないはずがない。

「まあ……」

と、美紀が一度語を止めた。渉己と隆治が美紀を改めて見ると、美紀は歩くペース落とし、うつむいていた。そのまましばらく歩いた後、顔を上げる。

「私がいつてることなんか、しょうちゃんもりゅうちゃんもとつくにわかつてることなんだろうけど」

顔から怒りの気が抜けて、真摯な顔つきになっていた。

「私はしょうちゃんの打撃力にはなれないから、心配なの。それだけわかって」

「わかってるよ」

と答えたのは渉己だった。

「これは100%私のわがままから始まったことだ。つき合わせて悪いと思うけど、付いてくるなっついていても付いてくるんだろ
うから、最大限二人の能力は使わせてもらおうよ」

渉己がいうと、二人はうなずいた。いまさら、だった。「あの日以来、二人は渉己の目的のために生きていく覚悟は出来ている。」

「まずは今日。今日でこれから先の展望が見えてくと思う。頼んだよ」

「ああ」

「うん」

さっきまで美紀に気後れしていた渉己の姿はない。そこにあるのは、とても高校生とは思えない眼光でまっすぐ前を見ている、まったく別人になった渉己の姿だった。

10 始まりの朝

新の怪我は大したことはない。それでも、やられた翌日に腹が痛むのは当然で、腹筋から胸にかけ、わき腹までがひどく痛む。

それ以上に痛むのは、負けた事実と、それを学校中が知っているだろうという予測に挟まれた心の方だった。

受けた恥辱は雪がなければならない。

体の痛みと心の痛みに顔を青くさせながら、新は悲壮なまでの覚悟を決めて翌日を迎えていた。

何があるかと、勝たなければいけない。腕や足の1本や2本はくれてやる。

それにしても、と新は思う。あれはなんだったのか。

ボクシングをやっていて、自分より強い相手などいくらでもいた。部長の名古屋など、あまりの強さにやりあうことなど想像も出来ない相手だ。ただ、あの男は体格からして違い、新が勝てる要素など外見から見出せない。

一方であの女はどうか。新より小柄で、体重など明らかに新より10キロは少ないはずだ。がっちりした体つきには見えないし、体育部に所属しているわけでもないらしい。

なのに、あの一撃を食らった瞬間、彼は彼女の動きすら感じることが出来なかった。何も出来ないどころか、何をされたのか理解すら出来なかった。

これは、圧倒的な力の差を示しているのではないか。

それを考えると、新の気分はどん底まで沈みこみ胃がきりきりと痛くなってくる。

それでも。

俺はそれでもあの女を倒す。何を犠牲にしようと、どんな卑怯な手を使おうと、勝たなければ自分は終わる。

岩崎涉己が登校してくると、秦が丘高校は異様な熱気に覆われた。格闘系体育部に個人が喧嘩を売るなどこのところなかったことで、しかもその相手が武闘派のボクシング部、売ったのが少女一人とくれば、注目を浴びないほうがおかしい。

彫りが深い整った顔立ちと家事万能という意外な一面が受けて、近頃女子の間で株が急上昇している矢木澤隆治と、ちょっと比較する相手が見つからないほどの美形っぷりで男子の視線を独占しつつある小林美紀、この目立つ二人に守られるようにして登校してきた岩崎涉己は、人々が思わず「あれか？」と確認したくなるほどに地味で、目立たない。

売れた名前の巨大さと実像の目立たなさのギャップがあまりにも激しすぎ、それがますます話題を呼んだ。

「岩崎つてのは結局何者なんだ？」

その辺りの情報が早かったのは、さすがに文化部連合だった。涉己の出身中学から近所さん、近所の商店にまで情報探索の網が張られ、わずか一晩で膨大な量の情報を集めていた。

早めに登校して情報を確認しようとした「文化部連合の女王陛下」柳澤奈乃香は、登校時間になってどんどん集まってくる情報を総合していた。

「武道場に通っている？」

メモの一枚に、岩崎涉己が小学生のときから街の武道場に通っていることが書かれていた。

「武零流という、日本古武術を源流とする道場です。詳しくはまだわかりませんが、割と大手の道場らしいです」

秘書役がノートPCを出して見せたのは、武零流のホームページである。全国主要都市に道場があり、その総本山は世田谷。秦が丘にも大きな道場があるらしい。

奈乃香がサイトを行きつ戻りつしてみると、ただ古流武術を継承しているというのではなく、最新の理論を導入しながら、かなり

科学的に武道を研究している流派らしい。

「引き続き調査は続けます」

「お願い」

とりあえずこのことは措いておき、奈乃香は別の情報に目を移す。小学生時代から、渉己は目立たない存在だったらしい。集まってきたメモを見てみると、特徴的なエピソードというものほとんど見当たらない。いじめを受ける存在ではなかったことは、小林美紀や矢木澤隆治が常にそばにいたからだろうと見当はつくが、それ以外の交友関係をほとんど確認できない。

そういうことがあるだろうか。本人がどれほど目立たない存在でも、まわりにこの二人がいれば、ごく自然に交友関係も広がりそうなものだ。

自分から閉ざしていたのかな。だとしたらなぜだろう。

回転のいい奈乃香の頭はそこまであっという間にたどり着いたが、その先の答えは、本人に直接当たるか、周辺からの情報を徹底的に集めて分析する以外に求めようもないだろう。

とにかく、目立たなさ過ぎるという点で異常性を持った存在、というところまでわかれば、一晩の成果としては充分すぎるほどだろう。

「日比野新はもう登校しています」

「様子は？」

「かなり精神的にはきているようですが、彼女を何が何でも倒すという覚悟は強いようです」

「今日中に動きそう？」

「そこまでは……」

「相手のあることだしね。彼女のほうはどうなのかしら」

「矢木澤が徹底的にマークしています。護衛役ということのようですが」

「彼は格闘系の部活には入っていたかしら」

「岩崎以上の帰宅部です。ただ、彼も町道場に通っているという情

報です」

「相弟子ね。強いのか？」

「同級生によると、少なくとも中学時代に売られた喧嘩に負けたことはなかったようです。ただ、自分からは絶対に喧嘩はしなかったそうです」

「なるほどね」

自らの強さを誇ろうとしない少年、ということとは、そんなことをしなくても自分の強さを確認できているということなのだろう。かなりの腕利きと見るべきだ、と奈乃香は一瞬で判断を下していた。

「どうして今まで彼がマークされていなかったのかしら」

「そうですね」

秘書役は少し考えて頭の中をまとめているようだった。

「……格闘系体育部は激しいスカウト合戦を繰り広げますが、その際もあまり注目を浴びていません。私たちのリストにも彼の名はありませんでした。その方面では目立たなかったようですが」

「目立たないようにしていた、と考えるべきね。岩崎ほど徹底していなくても、ここまで自分の存在を隠し通してきたのは、よほどのことだわ」

なにか、この一年生たちには、強い目的意識があるのではないか。奈乃香はそう疑った。

驚くべきは奈乃香の分析力で、集まった情報からわずかな時間でここまでの読みを示すのは、高校生レベルの洞察力ではないだろう。文化部連合の情報力も大したものだが、それ以上に、その情報を分析する奈乃香の力が傑出しているからこそ、文化部連合が恐れられる存在になったということが出来る。

そういう奈乃香だからこそ、親衛隊のような心酔する集団も出てくるのだろう。

ボクシング部の部室で、部長の名古屋和博がリングサイドのベン

チに座り込んでいた。

一年生部員はおるか、軽い階級とはいえ実力では全国レベルに達しようとしている新を、一瞬で倒した女がいる。

格闘技の無経験者ということはないだろう。何かしらの武道経験があるに違いない。

名古屋はボクシング馬鹿ではなく、格闘技一般に興味がある。だからこそ、ボクシング部で部長などを続けている。

ボクシングしかない人間になっていたら、たぶん自分はここにはいない。そう名古屋は思う。秦が丘で格闘系部活動の部長を務めるというのは、他の部との抗争劇で勝ち抜く宿命を背負わなければいけないということだ。空手部と対立するのなら、空手の動きを研究して対抗策を練らなければならぬし、そんなことはボクシングの正道から外れた行為である。

名古屋は、その正道から外れた行為にこそ楽しみを感じてしまった。

だから名古屋は様々な格闘技の素養がある。

その素養が、名古屋を不安にさせる。

いったい、どんな技術を身に付ければ、そんなに簡単に大の男を吹き飛ばすような芸当ができるのか。マンガや小説じゃあるまいし、それが簡単に出来るほど人間は便利にはできていないはずだ。

自分にならある程度は出来る自信はある。ただし、それは体重に比例した筋力があるからであり、今まで血を吐くようにして繰り返し修練し手に入れた、人並み外れた瞬発力と破壊力があるからだ。

自分よりはるかに重い相手を、それも同時に何人も打撃で倒すなど、想像の外にある。

自分が出て負けるなどとはまったく思いもしない名古屋だが、それにしても不気味な相手だ、という思いは抜けない。

狂犬、などと呼ばれ、手が付けられない喧嘩好き、あるいは武闘派などといわれている名古屋だが、半分以上はイメージだ。喧嘩は嫌いではないが、自分からあちこち売って回ったことはない。売ら

れた喧嘩はせいぜい高く買う主義だから、そのたびに悪名だけが一歩歩いていくのを、戸惑いながらも受け入れていたというのが真相に近い。

強い自分を誇る気分はもちろんある。もっと強くなりたいという欲求も誰より強いだろう。だから強くなれた。

だからこそ、意味がわからない強さ、というものに不快感を抱いてしまう。

「取り巻く状況なんか関係あるか。気に入らん奴は倒す。それでいい」

名古屋の中で、女相手に本気で果し合いをするということへの抵抗感は消えた。わざとことを単純化することで、彼は自分の中にある不必要な良心を眠らせた。

それが出来ることこそが、彼が強い理由であり、狂犬とも呼ばれる理由なのだろう。

新はおそらく勝てない。勝てないまでも、彼女の何かを引き出すだろう。弱点とはいわないまでも、不気味な強さのヴェールを多少は引き剥がすに違いない。そのくらいの強さは期待してもいいはずだ。

こちらの強さはどうせ丸裸だろう。今まで校内で何度も果し合いをして、何度か死闘と呼ばれる戦いも経てきた。その情報はどうせつかまれている。

それらの戦いの中で、名古屋の強さは充分すぎるほど人々に評価されている。それでもなお正面から喧嘩を売ろうというのだ。

面白い。それなら、こちらも全力で迎え撃つまでだ。

不気味な存在として彼の心に影を落としつつあった少女の姿が、次第に名古屋にとって快絶な存在に変わりつつあった。

11 朝の教室？

秦が丘高校で、あらかじめ予定された決闘が行われる場所となると、限られてくる。

なにしろ人の邪魔にならず、ギャラリーが集まっても問題ない場所で、職員の目にもあまり触れない場所、というと、そうそうあるものではない。

教職員は秦が丘伝統の「決闘」についてはほぼ黙認している。現行犯でない限り、あるいは重傷者が出ない限りは、校内秩序維持のためとして黙認するのがここ数年来の学校側の対応である。

今回、日比野新と岩崎涉己がやりあう。

具体的な話が決まったのは朝のこと。涉己ら三人が教室に入ると、新の側から依頼を受けた代理人が待っていた。

代理人を受けたのは、格闘経験はあるが体を壊し、現在帰宅部になっっている普通科の三年生、梶。レフェリー役ができ、しかもどの部とも利害関係がないという理想的な人材として、決闘騒ぎになるとよく引つ張り出される。

「細かいルールは俺に一任されているから、始まる前に説明する。

ただ、俺の指示には絶対に従ってもらうからそのつもりで」

「わかりました」

梶はかなり大柄な上に肉付きが良く、体重は0.1トン越えは疑いないところで、中学時代に柔道をしていたというが、格闘経験などなくても並みの不良なら喧嘩にもならないのではないかと思わせる巨体だった。涉己が正面に立っているのだが、ひどく小さく見える。

場所と時間が、この時伝えられている。

指定場所は特別教室が入っている棟の裏、「公会堂」などとも呼ばれる野外劇場施設のとなりの広場。体育部の部室が並ぶ棟がすぐ近くにあり、2つある体育館とも近いことから、よく体育部の補欠

以下クラスが筋力トレーニングなどを行っている場所だ。体育部棟や特別教室棟の窓から見下ろせる立地であることから、イベント性が高い公開の決闘がよくここで行われる。

時間は午後4時半。授業があらかた終わり、部活動は本格的に始まっている時間だ。放課からウォーミングアップの時間をとったタイミングなのだろう。この時間選びも、今までの数多くの決闘を踏襲している。

「基本的にはバリートウッド・ルールだと思ってもらってかまわない。ローカルルールがつく場合もあるけれど、今回は特に何もつかないと思う」

「グローブはつけるんですか？」

「こういう立会いの専用グローブがある。よく総合格闘技の試合でつけているようなグローブだけれど、それも後で渡す」

「他に防具や身に付けるものの指定はありますか」

「あまり危険物を身に付けられちゃ困るし、裸つてのも困るけれど、それ以外は特にはないよ」

梶と話している渉己の周りには美紀と隆治しかいない。他の人々は遠巻きに見ていて、ひそひそ言葉を交わすだけだ。なぜ渉己に梶が話しかけているのか、わからない人間も多いだろうし、そもそも梶がどういう立場の人間かわかっていない者もいなくはない。

ただ、この光景が意味することをきちんと理解しているものも少なからずいるわけで、教室の外、廊下からガラス戸越しに中の様子を伺おうとする生徒も多くいた。一年生に限らない。中には三年生も紛れ込んでいる。

まさかあの目立たないのが岩崎か？ まじで？ あれが新を倒したのか？ あんな一年いたっけ？

交わされる言葉のほとんどが疑問形というあたりに、渉己の圧倒的に低い知名度が伺える。

そして梶が話を終えて教室を出ると、たちまちのうちに渉己は囲まれた。

「ちょっとどうなってんだよ」

「あの話って本当？」

「岩崎が強いつてマジで？」

「今までそんなうわさ少しもなかったのに」

野次馬が口々にがなりたてながら涉己を囲もうとし、混乱に陥りかけた瞬間、隆治の声が響いた。

「ほら散った散った。今まで目立ってこなかったおかげで免疫がないんだ、あんまり急に囲むとキレて暴れるぞ」

「暴れるかよ」

という涉己の反論より先に、人々が後ずさった。

「ちよつとりゆうちゃん、皆が信じたらどうするのよ」

大人しやかで控えめで、というイメージで見られてきた美紀が、隆治の首根っこをつかむような勢いで文句をいう。その光景も人々の度肝を抜いた。涉己と仲がいいのは誰もが知っているが、そのために言葉を荒げるようなシーンは今まで見たことがない。

「それはそれでおもしろいかなあと」

「おもしろくないわよ、いい加減にして」

二人が口げんからしきものを始め、衆目がそちらに集まったその隙に、小さな事件が起ころうとしていた。

集まっていた野次馬のうちの一人が、涉己に後ろから腕を伸ばしていた。

同じ一年の、違うクラスの男子だった。背が高い、幅もそれなり以上にある大柄な男子だった。

ちよつと、常軌を逸している。

いきなり、涉己を羽交い絞めにしようとしたのだ。

隆治も美紀も油断していたわけではないのだが、まさかこの衆人環視の状況でそんな無茶をしてくる馬鹿がいるとは思ってもみなかった。

人に囲まれているような状況だから、当然、そんな大きい体で涉己のそばに寄ろうとすれば、障害は多い。その障害になる人間を弾

き飛ばすようにして、彼は渉己に後ろから飛びかかった。

渉己のわきの下辺りから腕を差し入れようとしていたところから憶測して、羽交い絞めにしようとしたのだろうと類推できたが、もっとも、それは実現できてはいない。

目が後ろにあるわけでもないし、渉己は振り返って状況を確認することすらしなかったのだが、何か起きているかは不思議とわかるらしい。

おそらくは周囲の人間が瞬時に見せた表情や視線の向き、音、声や呼吸音などから読み取るのだろうが、渉己の動きは、飛びかかってきた少年の行動以上に常軌を逸していた。

かくん、と膝を折るようにして、身を沈める体勢になるのだが、その速さが異常だった。溜めがない動きで、つまり予備動作なしでなぜそうまで速く動けるのか、経験がある人間ほど驚く渉己の動きだが、この時もやたら速かった。

すんでのところでは彼の手が背後から脇に差し入れられるのを避けると同時に、腰をひねるようにして上体をねじり、渉己の左肘が少年の左脚上部にめり込んだ。

脚に走る激痛に少年が叫ぶ暇もなく、渉己は続けざまにくるりと体を回転させ、右の手の平を少年の胸に叩きつけた。

掌底突き、という。掌とは手のひら、その底で突くから掌底突きというが、まともに踏み込みもできない状況下で、どう見てもがちり型の体格には見えない渉己がそんなものを叩き込んだところで、大した威力があるようには見えないのだが、そういう一般的な常識というものを徹底して破砕して回るのが渉己の宿命であるらしい。

少年は渉己の掌底突きを受け、前のめりになっていた体勢から思い切りのけぞり、後ろにいる同級生たちを巻き添えにした。そのまま倒れてしまったのだ。

男女入り乱れての悲鳴が上がり、その場は一転して阿鼻叫喚の図となった。

渉己はというと、一度蹲踞そんぎょの姿勢になって繰り出した掌底を収め

るような残身を見せると、そのまますくつと立ち上がり、何事もなかったかのように自分の席に戻っていった。

「悪い、涉己、気付かなかった」

隆治が青い顔をして謝った。護衛役を自ら任じておきながら、いきなりの大失態だった。

「しょうちゃん、ごめんなさい、私、りゅうちゃん、」

と動揺のひどい美紀は、おそらく自分が隆治に噛み付いていたせいで涉己を危地に陥れたと感じ、謝ろうとしていたのだろうが、涉己の事態の捉え方はまったく違っていた。

「落ち着いてよ。想定範囲内でしょ、こんなことは」

声は落ち着き払っていた。当事者とは到底思えない、静かな声だった。

「自分の力を誇示したい馬鹿はどこにでもいるものよ。どうせ背後関係もない、力が弱そうな私相手なら名を上げられそうだとか訳わからないことを平気で考える低脳よ」

人々を巻き込んで倒れた彼は、その人々に小突かれたり蹴られたりしながら床に転がり、それでも立とうとしていたが、それを見る涉己の目は、さげすみや冷たさすら感じさせない。

「やりたいようにやらせておきな。心配しなくてもあんなのにはやられないし、まだ来るようでも、関節の3つ4つ壊せばもう襲ってくる気にもならないでしょ」

自分と相手の実力差がありすぎ、むしろどれだけ手抜きしてやればいいのかを測っているかのような、哀れみとも取れるような目だった。

「……これでちつとは涉己の実力がわかったか？」

隆治があきれたようにため息をつき、それからいうと、人々は目が覚めたようにうなずいた。

朝の教室で起きた事件は、同級生たちの野次馬根性にある程度の

歯止めをかけた。少なくとも、とてつもなく強いらしいことだけはわかった。うかつに手を出せば、ありえないほどの報復を受けるだろうことも。

涉己襲撃犯の正体もすぐに割れた。涉己のいうとおりで、女相手なら自分の力を誇示できるだろうし、羽交い絞めなら「女に襲いかかった」という悪評にならず笑い話ですむのではないかと思ったのだという。相撲部所属だというが、相撲部は校内抗争の中ではほとんど役割を持っていない弱小部で、背後関係もなさそうだった。

「岩崎涉己という怪物がいる」

という噂は、前日のボクシング部員たちとの乱闘騒ぎよりも、この一件によってむしろ校内に広められることになった。

11 朝の教室？（後書き）

書き溜めが一切無くなりました。年末年始は帰省やあいさつ回りで忙しいのでどれだけ書けるかわかりませんが、少しでもアップできればと思います。

12日比谷新戦

新は正統派のボクシングスタイルで現れた。上半身は裸、黒いトランクスを身に付け、編上げのリングブーツをはいている。プロテクターは着けていない。マウスピースはセコンド役の一年生が持っている。

一方、敵の渉己はというと、どうやってたらの発想が出てくるのかとみんなが疑問に思うような姿で登場した。

今やその姿で体育の授業を受けている姿を見かけるほうが難しいといわれる、学校推奨の体育着を着ていた。一応指定制服と共にこれを身に付けるのが理想とされているのだが、「これを着なければ校則違反」というほどの固い縛りではないため、少なくとも体育部所属の人間はまずこの指定ジャージは着ない。

そもそも、この学校で正規の手順を踏んで決闘をするような人種は、たいがい格闘系体育部か応援団といった組織に所属している。そんな人間が学校指定のものなど着るはずもなく、「手合い」の場でこの指定ジャージが見られるというのは、一種奇観ともいえた。

しかもこの女、上下きちんと長袖でそろえた上に、指定シューズまではいている。これでメガネでもかけていれば完璧だったかもしれないが、渉己は裸眼で2・0だからその必要もない。

周囲がどよめいたのは、地味なルックスもここまで行けばむしろ個性になるという事実に驚いたからかもしれない。

「やっぱりこの格好は良くないな」

とつぶやいたのはセコンド役の隆治で、美紀はコメントすらない。一番強硬にこの姿に反対したのは美紀で、「美しくない！」と最後まで抵抗したのだが、渉己は頑固だった。

「私はこれで行くの。口出ししないで」

美紀に怒られることを恐れている渉己と隆治だが、特に渉己は、自分の主義主張は、たとえ美紀に何をいわれようが絶対に曲げない。

逆に主義主張にかかわらない部分では美紀に弱く、怒られてはしょんぼりしている。

その涉己を、新は追いつめられた者が見せる感情のこもらない目で睨みつけていた。もともと顔つきも鋭い方だから、ひどくがつた感じがする。目の下のくまが、痛々しさをすら感じさせる。

睨まれている涉己の方は、感情がこもっていないという意味では似ているものの、与える印象がまるで違う顔をしていた。

ひどく透き通った顔をしていた。

これから成績には直接関係ない体力測定をします、という時でももう少しプレッシャーがかかった顔をするのではないか。

特に感情らしい感情は見られず、緊張感がみなぎっているわけでもなく、といったとぼけたりはぐらかしたりする気配もなく、期待もせず絶望もしないという、とてもこれから決闘に及ぼうという人間とは思えないような、落ち着きすぎるほど落ち着いた顔をしていた。ポーカーフェイスといえば、これほどのポーカーフェイスもない。

その顔に作為がかけらも見当たらないのが、涉己というまだ16歳にもならない少女のきわめて高い演技力を示しているのか、信じがたいほどの落ち着きの証拠と見るべきなのかどうかは、誰にもわからなかった。

わかるのは、メイクもせず、眉の手入れもしているのかしていないのか微妙なその顔は、誰にとっても平凡という印象以上のものを感じ取るのが難しいという事実だ。

そして、時間は来た。

立会い役の梶が、群衆の中から姿を現した。その手には、この手合いで使われる二人分のグローブがある。

「そろそろ始めようか。二人とも、グローブを配付するからこちらへ」

巨漢の梶が手にしているグローブは、それを受け取ることと退路がふさがれる。手合いを控えた最後の意思表示がグローブの受け渡

しで、受け取ってしまえば泣こうが喚こうが、勝負がつくまではこの場から逃げられない。

梶の言葉に、二人が動く。

新がボクシング部陣営から離れた。立ち上がる時にひとつ「ふっ」と気合を入れ、右拳を左手に打ち付けてから前に出る。

渉己は至って平静で、梶の言葉に「はい」と小さくうなずくと、ごく当たり前のようになに出る。

広場の中央で、二人が向かい合う。

新は強い目で渉己を睨みつけていたが、渉己はそれを平然と無視し、梶を見てグローブの受け渡しに集中している。

「ルールは事前に説明した通り。噛み付き、金的など一般的な反則が採用されているから気をつけるように。凶器の使用ももちろん不可だ。ボディチェックを受けてくれ」

グローブを渡す前のボディチェック。普通は梶が行うが、さすがに女子のボディチェックは梶自身では行わない。梶が指名した女子が行う。

それが終わると、二人に改めてグローブが渡され、梶とギャラリの面前でグローブを着ける。これは、以前グローブの中に鉛を仕込むなどの不正が行われ、重傷者が出て以来の伝統だった。普通は試合前に監視人の同席のもと、人の手を借りてバンテージを巻いてから着けるのだが、それも禁止されている。バンテージは巻いてもいいが、というより巻かないと直にグローブをつけても手を傷めるだけなのだが、それを巻くのも梶達の面前である。

新の後ろから一人のボクシング部員がついてきていて、梶の審査を受けたバンテージを力強く巻いていく。新はその手元を気にもせず、渉己を睨みつけていた。

渉己の方はというと、ついてきた美紀にバンテージを巻いてもらっているのだが、緊張感がない。

「マウスピース忘れちゃったね。まさか誰かから借りるわけにも行かないし」

「しょうちゃん、準備万端だつて胸張つてたじゃない」

「そのつもりだったんだよ。まあ、いらないつちゃいらなひんどけど」

「大した自信ね。殴られないからいらなひってこと？」

「自信つていうか、計算ね。どう組み立てていくかね」

「シミュレートできてる、と」

「でなきゃ戦えないでしょ、男女の体力差考えたら、ものすごいハ
ンデ背負つて戦うわけだし」

それは大向こうに聞かせるためという口調ではない。涉己も美紀も声が小さくて、すぐ近くにいた新たちにもろくに聞こえてはいない。

「心配はしてないけど、本番まで遊ばないようにね。日比野先輩だつてそれなりの相手なんだから」

美しい顔に特別表情は浮かべず、美紀がいう。対戦相手には失礼な話だが、日比野新を、この二人は最初から重視していない。

「わかつてる。一切遊び無しで行くよ。ギャラリーにはつまらない展開になるだろうけど」

そこまで言つたところで、涉己のグローブ装着が終わつた。

「火花を上げるわ。名古屋を引きずり出してね」

顔を上げた涉己の視線が、新の横を素通りし、その後ろ、ボクシング部のメンバーが集まつている一画に射込まれた。

大して鋭くもない視線だが、それは確実にボクシング部部長、名古屋和博の目を捉えていた。

体格差のありすぎる二人の視線がぶつかり、絡み合う。

そのタイミングで、新の準備が整つた。

「どこを見ていやがる。てめえを殺すのは俺だ、間違えるな」

低く抑えたその声には、本物の殺気がある。新はそこまで自分を追い詰め、気を昂ぶらせていた。普段はそんな言葉などどこから出てくるか想像もつかないような、穏やかな少年である。

そこまで彼を追い詰めた涉己の方は、その程度の言葉では小揺る

ぎもしなかった。

「間違えてないよ」

一言で返すと、渉己は初めて、新に真正面から向かい合った。両手を下ろし、何も力が入っていない姿でまっすぐに立つ。

梶が告げる。

「ではお互い握手を」

二人は向かい合い、手を伸ばす。

ぎりぎりとし渉己を睨みつける新の握手は固い。渉己はそれを受け流すように軽く握り返した。

手が離れ、体が離れる。

梶が、他の人間が、その場から離れる。

二人の間は正確に7メートル。

梶の手が上がる。

群集の興奮は最高潮に達し、梶の手が上げられた瞬間に静まり返った。

一呼吸置き、長身の梶の体が躍動し、思い切り腕が振り下ろされた。

「ファイト！」

ファイティングポーズを取った新に対し、渉己は右足を一步引いただけである。腕も上げず、半身になって新を見ている。

「おらあ！」

気合の一声。

新が拳を握り締め、飛び出そうとした。

渉己の上半体がわずかに沈む。

そのタイミングを、新は見逃さない。この少女の飛び込みの速さは身に染みて知っている。

飛び出そうとした足を止め、むしろ新はスペースを空けようと横

にスライドするように動いた。出端をくじいてしまえば、涉己がどんな化け物でも、無理に入り込んで来られないはずだった。

新は、体を近づけて戦うインファイトも、遠い間合いから勝負をするアウトファイトも、どちらも器用にこなすタイプのボクサーである。小柄ではあるが、身長に比べて長い手足がそれを支えている。特に下半身が強く、ウェートから予測されるパンチ力をはるかに超えるブローで、一撃で相手を葬るフィニッシュも持っている。

間合いを空けての勝負なら、自分以上に軽量な涉己相手に、そう劣る勝負にはならないはずだ。

そう考えてのことだったが、涉己の動きは、相変わらず新の想像を超えていた。

涉己は間を空けようとした新の手元に無造作に飛び込んできた。

驚くことはなかった新だが、こうまで放胆に飛び込んでこられると、何をする気かと身構えてしまう部分はある。何が起きようと対応できるよう、それでもしっかりと構える。

左手を軽く握って顔の前に立て、身を低くして飛び込んできた涉己は、うかつに手を出すまいと構えた新の至近距離まで一気に飛び込むと、左足を大きく踏み込んだ。ずしん、と地響きまで感じられるような強烈な踏み込み。

同時に涉己の右拳が新の両腕のガードに打ち込まれた。

瞬間、新の体が浮いた。

見ていた名古屋が腰を浮かせた。

「重い……」

凄まじい一撃だった。

きつちり準備して待ち構えているボクサーのガードにパンチを打ち込んだところで、ウェートが軽い方が重い方の体を浮き上がらせるなど、常軌を逸している。

涉己の体は、だがパンチを出したところで止まってはいない。

右拳を打ち込み、素早く引くと共に、上体を思い切り沈め、くると回転させていた。新の方に重心を残したままの素早い回転で、

渉己の体は新にとっての右側に出ていた。

新としては、そのトリッキーな動きに惑わされず、上体が上がったところを狙い打てばいい。そのはずだったし、新はそうしようとした。

だが、渉己の動きは完全に新の想像力の限界を超えた。

渉己の体が回転し、自分の右に出ようとしているその頭を正面に捉えようとした時、視界から不意にその姿が消えた。

それが、上体を後ろに倒すようにして無理やり体の方向を変えたのだとわかるまでの間に、渉己は荷重移動を終え、軸となる右足を回し、腰から左足をむちのようにしならせて、新の右肩に蹴りを叩き込んでいた。

新は驚きつつも、それを受けた。受ければ相手の姿勢は崩れている。彼の大チャンスが訪れるはずだった。

だがその蹴りは、新の体を壁として使い、渉己が自分の体のバランスを強引に変えようとしていたに過ぎなかった。左足の蹴りで、一度崩したバランスを無理に戻した渉己は、次の瞬間には右腕を新の左腕に絡めていた。

あまりにも速いその動きは、新自身には理解できなかった。

絡めた右ひじと押し付けた左足、滑るよう移動した右足の三点でバランスをとりながら、渉己は左手を新の腹に叩きつけた。それらの動きのどこにも遅滞がない。

そして左足を思い切り離し、その勢いで右腕に体重を乗せ、一気に新の姿勢を前に崩す。

腹を打たれた新が思わず前かがみになるうとする、その動きに異常な加速がつき、前のめりになっていく。体を開くようにして渉己は新の体を崩していき、まるで背中を向けるような姿勢になるまで持っていくと、腰を新の体の下に入れ込んだ。

そしてそのまま跳ね上げる。

「ばかな」

見ていた名古屋がうめいたのは、変則的ながら、新の体が見事な

背負い投げで宙を舞った瞬間だった。

最初の重いパンチからここまで、2秒とかかかっていない。

渉己は、新のひじを極めたまま投げ飛ばし、そのままでは自分の腕も破壊されてしまうから、途中で腰から背中に新を乗せた状態でひじを外している。同時に、左手で新の肩をおさえ、勢い良くその体を回転させると、ぐっと自分の方に肩を引き寄せるような仕草をした。

新の体は綺麗に宙を舞った。

そのまま落ちれば、投げ手が腕を押さえて引き上げていない時点で、かなり危険な「投げっぱなし」技だが、渉己が彼の肩を引き寄せたせいで、新の頭が素早く回転させられていた。肩を軸に回転した新の体は、地面に落ちる前に脚や尻が下になっている。

そのまま地面に叩きつけられた新は、見ているほうが感心するくらい綺麗に脚全体を同時に大地に衝突させていた。軸が曲がっているから、極められていなかった右腕が同時に地面にぶつかるとおまけつきで、新自身の意図によらず、完璧な受身になった。

何が起きたのかわかっていない新は、ボクシングではありえない衝撃を受けて動転しているところに、渉己のとどめの攻撃を受けていた。

投げ飛ばした新の上に乗るようにして自身も倒れこんだ渉己は、それまでの動きからしたらむしろ緩慢なほどの動作で、腕ひしぎ十字固めの態勢に入った。

ここまで来ると、群集にも渉己のやっていることが理解できた。ようやく、人々の目にもわかる程度の速さになったということだった。

そこまではただ見守るだけで、声すら上げられずにいた群集が、一気に弾けた。

大歓声の中、渉己は新の腕を絞り上げた。

新の抵抗は長くは続かなかった。

関節技を抜ける方法など、ボクシング部の新が知るはずもない。

まして、完璧に決まった腕ひしぎは、プロの格闘家でも外すのは至難の業である。

勝負は決まった。

13 インターバル

新が涉己の脚を二度叩き、タッピングが成立。その瞬間、手合いの開始からわずか15秒足らずで、勝負が決まった。

群衆が沸いた。

大歓声の中、涉己は無表情に新の腕を外すと、ゆっくり立ち上がった。

「立てる？」

とても数秒前まで真剣勝負の中にあつた人間とは思えない、穏やかな顔と声。手を伸ばされた新は、それを見てすっかり毒気が抜かれてしまった。

「ああ、投げ方が良かったからな」

皮肉というより、本音だった。もちろん体中が衝撃で痛むし、腕ひしぎを食った腕は悲鳴を上げているが、自分がどう投げられ、それがどれだけ巧妙なものだったか、わからない新ではない。わかっていて反発するほど、自尊心も大きくない。

「投げられ方も良かったよ。変に暴れたりすると、受身まで持つていけないんだけど」

伸ばした手を新が取ると、涉己はぐつとその身を起こした。やや顔をしかめながら新が立ち上がる。

「あそこまで綺麗に投げられたら、抵抗するだけ無駄だしな。抵抗せずに投げられて、それからのことはそれから考えればいいかな、と思っただけだな」

「暴れてくれれば、それでわざと崩して頭から落としてやっても良かったんだけど」

「怖いこというな、お前」

新が苦笑した。涉己も小さく笑った。

群衆の大歓声に、それからも涉己は無関心だった。笑顔は新にだけ向けられ、すぐに引つ込められた。

立会人の梶が勝者を告げる中、渉己の目は一点に向けられていた。新の背後、ボクシング部が陣取る一画の中心にいる男。

坊主頭に近い髪型の名古屋和博が、全身の筋肉という筋肉から殺気を放っているような気配で、渉己を睨みつけていた。

「岩崎」

視線の衝突に気付いた新がいう。声が震えている。

「お前、まさか、部長とやる気かよ」

「そのつもりだけど」

渉己の答えは簡潔で、迷いはなかった。新は一瞬その様子に呆然としてから、渉己の両肩をつかんだ。

「やめておけ、お前がどれだけ強いかはわかるけど、あの人は別格だ。殺されるぞ」

新の目にはありありと恐怖が浮かんている。

「身体能力は天才としか言いようがないし、体もでかい。なにより、一度敵と思ったら、相手が誰だろうが容赦とか手加減なんて言葉は

……」

「知ってるよ」

渉己は両肩をゆするようにして新の手を払った。口調は至って素っ気ない。

「天才だから今やるんだ。向こうも初めからその気で来てる。邪魔するな」

絶句する新を置き去りにして、渉己は歩き始めた。

名古屋和博。

高校ボクシング界では有名人である。

日本人ボクサーとしては大柄な部類に入るミドル級ボクサーで、体がまだ成長しきっていない高校生ではなおさら少ない。

彼が有名なのは、その強さというより、凶暴さである。

高校生のボクシングはプロボクシングと違い、ポイント制が基本となる。有効打をどれだけ相手に打ち込めるかが勝敗の分かれ目となり、相手からダウンを奪ったり、KOしたりすることは、結果論であるに過ぎない。

そんな中で、名古屋はその高校生離れした筋力と天性の打撃センスで相手を圧倒し、2分1ラウンドの3ラウンド制という短い時間の中で、相手をぶち壊すことが彼にとっての勝利というかのような試合運びをする。

ヘッドギアをつけ、大きなグローブをつけて戦われる高校生ボクシングで、試合中KOを狙うのは無茶といふべきだが、名古屋はそれをやった。練習試合を含めたKO率は70パーセントを超えるから、はつきりいって異常である。

そのファイトイングスタイルはインファイトを得意とする。相手と間合いを詰め、殴り合いを仕掛ける場合が多い。そういうボクサーは足が止まりがちになってしまう者が多く、不必要に相手の打撃を受ける場面をよく見るものだが、名古屋が天才と呼ばれるのは、凶暴なほどのインファ이터のくせに、相手の攻撃を避けるのが恐ろしく上手いからだった。

新などは身に染みて知っているが、この男の防御は恐ろしく速く、上手い。インファイト、つまり相手の懐に飛び込んでのボクシングをしておきながら、相手のパンチを凄まじい速度で避け、避けきった上でカウンターパンチを繰り出す。

彼と戦って、殴り合いになった者はいない。殴り合いスタイルを得意とする者は早々に倒されてしまふし、殴り合いスタイルを嫌う者はそれを避け続けた上でやはりやられてしまうからだ。

さらに悪いことに、この男は、外見の凶暴さからは想像がつかないほど頭がいい。

試合運びは、ただ暴れているようでいて、実はかなり計算高い。相手の弱点は冷静についてくるし、その局面で相手が一番嫌がるような攻撃をきつちりと決めていく。

1年生のインターハイで早くも当時ライトウェルター級の覇者となると、次々に国内タイトルを奪取。体が大きくなり階級を上げても快進撃は続いた。

もつとも、あまりに凶暴すぎ、たびたび指導を受けるなど、全国にも様々な悪行で名を知らしめている。一度は大会直前に校内の手合いで相手を再起不能に近い重傷に追い込み、普段は傍観している学校側が乗り出し、停学処分となり出場をふいにしたこともある。

そういう男が、涉己に殺気だった目を送っていた。

一時はその存在が快絶、とまで涉己のことを思った名古屋だが、実際に新が目の前で大勢のギャラリーの前で倒される、しかも秒殺に近い倒され方をされてしまえば、心中穏やかでいられるはずもない。

新も新だ、と名古屋は思う。

勝てるとは思っていなかったが、ああも簡単に負けてしまえば、彼女の弱点を見つける余地など無いに等しい。

わかったのは、その体格からは想像できないほどの強力な打撃を持っていること、柔道技とも違う独特な投げ技を持っていること、だが正統派の柔道技である腕ひしぎ十字固めをきれいに極められる技術も持っていること。わからないよりはましだが、攻め手を見つめるには程遠い。

視線をこちらに飛ばしてくる涉己の表情は、多少離れた場所にいる名古屋の目には、恐ろしく落ち着いて見える。ボクシングの試合でも、校内の手合いでも、こんな顔で勝負を挑んでくる相手はいなかった。強敵は数多かったし、彼も無敗ではないが、なめた視線を送ってくる相手や、落ち着いているように虚勢をはってみせる相手はいても、そのまま授業に出ていてもおかしくないような顔で名古屋を見つめている相手は見たことがない。

だが、わざわざこの場で名古屋を見つめてくる意味はひとつしか無いし、いくら渉己がのんきな無表情とはいえ、その意味を取り違える名古屋ではない。もともと、校内一の武闘派で鳴らしている男である。喧嘩を売られて黙って見逃せる性分でもない。

その渉己の視線に、立会人の梶も気付いたようだった。

梶としては、新と渉己の手合いが終わった以上、群集もろとも解散を告げるべきだった。実際、それをしようとした。だが、肝心な勝者の渉己が梶を見ようとせず、ただ一点、ボクシング部陣営の中心に鎮座する部長、「狂犬」名古屋に視線を飛ばしていると察してしまった以上、単に解散といえいいというわけではなかった。

渉己が、あるいは名古屋が、次の手合いを希望しているのならば、その調整もしなければならぬ。ただの喧嘩にしまわぬように立会人がいるわけで、確実に起こるとわかる衝突は、第三者がいるこの時点で調整してしまうのが彼の大事な仕事だ。

渉己と並ぶとなおさら大柄さがわかる梶の巨体が、名古屋との視線の絡み合いの間に割って入った。渉己が名古屋に向かって歩き出しかけ、名古屋がその気配を感じて折りたたみすから立ちあがろうとしたタイミングだった。

「両者とも待て」

ずいっと大きな両手を双方に突き出し、二人の動きを止めようとする。

渉己は抵抗せずに立ち止まった。

名古屋はその場に立ち、剣呑な表情で梶を見る。

「なんだ梶、ただ話をしようってだけだ、邪魔すんじゃない」

「わかってる」

梶は逆らわない。

「わかってるが、ここは手合いの場だ。勝手をされれば立会人の俺の顔が潰れる。一応手順は踏んでくれ」

梶がいう手順とは、手合いの場では、解散の宣言があるまでは立会人が絶対者であり、両陣営の者が言葉を交わすには立会人の許可

が必要ということ。当たり前といえば当たり前前のルールだが、だからこそ、これを破られるというのは、立会人としては大恥をかかされることを意味する。

公正さでは今まで誰からも文句をいわれたことがない梶である。秦が丘最高の立会人である梶にこういわれてしまえば、名古屋といえど我を通せるものではない。

その様子を見て、梶は手を下げた。

「結構。では、改めて話を始めてくれ。ただし俺が同席させてもらうが、構わないか」

梶の問いかけに、どうせまともな会話を交わす気もない二人は、それぞれの表情でうなずいた。名古屋は傲慢に、涉己は鷹揚に。

梶が体を入れるようにしていた二人の間に空間が出来た。二人はゆつくりと歩み寄る。

群集は何かが起きようとしている気配を察し、ざわざわとどよめき始めていた。

名古屋の後ろで、置いてけぼりになっている部員たちが、緊張した顔つきでじっと推移を見守っている。

涉己の後ろで、負けたばかりの新が、組んだ腕にぐっと力を入れながら事の成り行きを見守っている。

さらにその後ろでは、美紀と隆治が、それぞれの表情で二人を見つめていた。美紀は祈るように。隆治は一挙手一投足見逃すまいとするかのように。

「始めまして、先輩」

涉己はここで初めて、花が咲くような大輪の笑顔を見せた。屈託の無い、なぜこの場面で出てくるか理解できないような、これだけは平凡からは程遠い、美しい笑顔だった。

14 名古屋戦直前

「ふざけた女だな」

名古屋が口だけで笑った。目はまるで笑っていない。

「新をいのように転がしておいて、笑顔でご挨拶か」

「挨拶は笑顔でするべきものだわ」

涉己は笑顔のまま平然といい放った。

「これからしばらくは嫌でも顔を合わせる事になるだろうから、名乗っておくわね。普通科1年A組の岩崎涉己、よろしく、先輩」

名古屋はいかつい顔をしかめるようにして、鼻で笑った。

「大した余裕だな。俺にも名乗らせる気か？」

「私は充分知ってるから必要ないわ」

涉己は受け流すようにそう答え、そこで笑顔を引つ込めた。

「さて、私は挑戦状を叩きつけたけど。先輩はどうする？」

どこまでも落ち着いた声でいうから、名古屋も、立ち会っている梶も、この少女のことがわからなくなってきた。充分名古屋を知っていて、なぜこの態度が取れるのか。

「いったいどれだけ自分に自信を持っているのか。」

「挑戦状だと」

「そう。先輩に対して、日比谷新を倒すこと以上の挑戦状があるのかしら？」

涉己はまた笑った。またしても透き通った笑顔。

名古屋は怒る気にもなくなってきた、毒気を抜かれたような声で応じた。

「無いな、それは」

どうも調子が狂っている。素直に受け答えてしまった。涉己はそれを聞いてうなずいた。

「そついうわけだから、決闘を受けてもらいたいよね。出来れば今すぐ」

力のこもらない声だが、内容は極めて直接的な挑戦だった。

改めて名古屋の眉に怒りがこもる。

「なめられたもんだな。今すぐだと？」

「うん。今すぐ。なんならこの瞬間から」

梶が驚いたような顔をする。

「ちよつと待て、たつた今一戦やつたばかりだろうが」

「あれで疲れると思うの？」

涉己がまっすぐに反論し、梶は答えに詰まった。確かに疲れるような対戦ではなかった。

「立会人がいて、ギャラリーも嫌っていうほどいて、お互いにやり合う意思があつて、場所も確保できて、他に何か必要なものがある？」

涉己は畳みかけるようにいうが、口調が穏やかだから、梶にも責められているように聞こえない。

「お前の」

と、名古屋がいう。口元に笑みがある。

「度量次第だろ？」

梶が受け入れるかどうかだけが問題だ、と名古屋はいつている。

その通りの話で、二人の視線を受けた梶は、視線を落とした。

途端に、周囲の声が耳に入ってくる。

観戦しているだけの群集は常に無責任なものだが、さすがに今回は反応が分かれている。無責任なまま二人の対戦を求める歓声がある一方で、どう見ても涉己が壊されて終わりという結果しか想像できない二人の立ち絵に、拒否反応を起こしているギャラリーもいる。

ぱつと見、だけで判断することが許されるのなら、梶は止めている。どう考えても涉己に勝ち目は無く、勝ち目が無いだけならともかく、相手が悪すぎた。

名古屋は手加減無しで潰しに行くに決まっている。本人の性格もそうだが、ボクシング部が涉己から受けたダメージがでかすぎた。

部長として、渉己を潰さなければ名古屋の立場が無い。やりすぎるな、というほうが無理な状況だった。

ただ、止めても、この二人はいずれやりあうだろう。別の立会人を見つけて、別の時間に別の場所で戦うだけのことで、先延ばしにしかない。

ならば、自分が立会人をやっている中で戦わせ、やばくなれば止めに入ればいい。他の立会人候補より、うまくやる自信が梶にはある。伊達に最高の立会人と呼ばれているわけではない。

梶は頭を上げた。

「いいだろう。俺が立ち会う。ルールは特定の競技ルールに従わない一般ルール、開始は5分後、両者、異存はあるか」

「無いな」

「無いわ」

名古屋と渉己が同時にうなずく。梶は声を張り上げた。

「異例ではあるが、手合いを続行する。開始は5分後、両者、一旦離れて」

それまでのどよめきが、再び歓声に変わった。

「ギャラリーにほとんどのメンバーがそろってる」

渉己が自陣のいすに座ると、たった二人、渉己陣営にいたうちの一人、隆治が話し始めた。

「中華拳法部の部長はあつちの一団の中だな。その近くにいるあのやたら背がでつかいのが空手部の部長だ。反対側に見えてる柔道部のお歴々の中にさつき部長がいた。ここからだ見えにくいけど、その陰にキックボクシング部がいたな。それから」

地中海系のくつきりした顔立ちの隆治は、渉己の影響なのか、地の性格なのか、この場面で異様に落ち着き払っている。

「あつちの校舎の3階の窓から、文化部連合の女王様が、お付きの方々と一緒にご観戦遊ばされてる」

「ふうん」

涉己は隆治の説明に視線を上げ、話題の校舎の窓を見上げた。その動作に、美紀の声が重なる。

「文化部連合は望遠カメラを3台準備して、角度をつけて同時撮影しているわ。たぶん、さっきの対戦もきっちり動画を撮られて、分析に回されると思う」

「金かけてるねえ」

「そうでもないだろ、デジカメで簡単に動画が撮れる時代だし」

涉己の慨嘆に答えたのは隆治。

「俺らが動画撮るのに苦労した5年前より、ずっと機材価格は下がって、性能は上がってる。望遠レンズだな、多分一番高いのは」

「そっか」

タオルをきれいにたたみながら、涉己がうなずいた。渡されたのはいいが、汗もかいていないのでは活かしようがなく、持っただけも仕方が無いからしまおうとしているらしい。

「取り込むか排除するか。しょうちゃんが名古屋先輩に勝つにしろ負けるにしろ、とんでもない実力者なのは確実なんだから、女王陛下はなにかしら働きかけてくると思う」

美紀がいうと、涉己はふつと笑みを浮かべた。

「せいぜい高く買わせて上げられるように、値段つり上げときますか」

「ギャラリーがだいぶ豪華になっている」

副部長がいう。名古屋は視線は合わせず、黙って聞いていた。

「大抵のメンバーがそろっているな。いつもどおり、女王陛下は高い窓からご観戦中だ」

名古屋は視線を上げようもしない。周囲の雑音に興味は無いらしい。

「新」

低い声で後輩を呼ぶ。負け戻ってきたばかりの新は、緊張し青ざめた顔色で名古屋の前に立った。

周囲は新がぶっ飛ばされるのではないかと思っ て身構えたが、名古屋は動かず、低い声のまま新に問いかけた。

「どう思った、あの女」

新は青い顔のままじっと立ち、ややあつてから答えた。

「……途方もなく強いです。最初の一撃、来るとわかっていても体が浮きました。そこから先は、もう、何をされてるのか全然わかりませんでした」

それは率直過ぎる答えで、その言葉で名古屋が怒るのではないかと周囲はまた緊張したが、名古屋はじっと聞いているだけだった。

新は続ける。

「今まであんなタイプとはやりあったことがありません。少なくとも、競技としての格闘技とは違う動きだと思います。投げも柔道とは違ったし、あんな踏み込みの突きだつて空手にも無い動きです」
強いていうなら、と新はいう。

「前にテレビで見たことがある古流柔術に似ていました。ひざをわざと折って倒れこむ荷重の移し方とか」

「……そうか」

名古屋の目が光った。新の言葉に、思い当たることがあつたらしい。副部長も同じで、ぱちんと指を鳴らした。

「古流柔術か。なるほど、確かにあの倒れこみ方はそうかもしれないな」

「それから」

新はいいにくそうに続ける。

「……これは、そう感じたつてだけなんですけど」

名古屋が視線を上げて新を見た。次の言葉を求められていることがわかったから、新は続けた。

「あいつは、消えます。どうやってるかにはわかりませんが、視

界からいきなり消えるんです」

「そんなわけはないだろう」

副部長がいう。彼も一部始終を見ていたし、恐ろしく速い涉己の動きもわかっている。

「あまりに速いから目で追えなかったんだろう」

「だと思います。ただ、あいつがそういう動きをするってのがわかってるのに目で追えませんでした。異常、だと思います」

「なるほどな」

名古屋が低くうなった。口を挟もうとしていた副部長が、それを聞いて半歩下がった。

「お前の目をごまかすくらいに速く動くなんてのは、人間には不可能だ。そいつは速いんじゃない、上手いんだな」

「上手い？」

新と副部長が同時に反問すると、名古屋はつまらなさそうに答える。

「相手の想像の裏をかく動きをすれば、相手の先読みの視線から外れることが出来る。そうすりゃ相手からは消えたように見えるし、不意もつける。ボクシングでもよくやるだろうが」

確かに、よくやる。フェイントで相手の目や予想を裏切り、目の前から消えたように見せるテクニクは、格闘技に限らず、バスケットボールなどの競技でも日常的に見られる。

「それが異様に上手いんだ。俺のようにな」

そついうと名古屋はにやつと笑った。

新も副部長も、反論する気はなかった。

名古屋という怪物は、相手の呼吸を外すのがうまい。だからインファイトで相手の攻撃が当たらないし、アウトファイター相手にも容易に懷に飛び込むことが出来る。

その実績を一番近くで見てきたのが副部長であり、新である。

「なかなか楽しめそうじゃないか。せつかく本気を出そうというんだ、それくらい楽しみが無いとな」

そういつと名古屋は立ちあがった。

梶が手招きしている。

開戦まで、ごくわずかな時間しか残されていない。

15名古屋戦？（前書き）

毎度ですが長く空けてごめんなさい。書く暇と体力が無いのですが、やっぱり久しぶりに書く楽しいですね。もうちょっと更新できるようにしていきたいと思います。

15名古屋戦？

長く時間はかからない、とは、格闘技の経験が無い「女王」奈乃香にもすぐに見当がつく。

高い窓の特等席からの優雅なご観覧、などとあちこちからいわれてはいるが、実のところ、自分が階下に降りて観戦しようとしたところで、間近で見て格闘技を理解できる目を持っているという自信が無い。

少し離れたところから、解説役を脇に置いて、さらに別角度からの動画などもチェックしながら観戦するのが、一番手っ取り早い。

文化部連合は情報が命。この戦いで岩崎涉己の戦闘力を丸裸にするまで分析しつつし、今後の校内政治の運営に活かさなければならぬ。そのためには、人々と一緒になつてわいわいと観戦するというわけには行かなかった。

奈乃香自身は内心、そういう観戦もいいなあ、と思っていたとしても。

「ウェイトが違いすぎます」

解説役は女子レスリング部幹部。レスリング部自体は校内抗争の中で柔道部連合の一員とみなされているが、女子部は人数も少なく戦力にならないことから、文化部連合との繋ぎ役になっている。

「格闘技におけるウェイトの違いは絶対です。あそこまで違つてしまえば勝負になりません」

こうして奈乃香とその側近たちに手合いの解説をするのも、女子レスリング部員たちの重要な仕事だ。

「単純な話です。質量に加速度の二乗をかければ運動エネルギーの量になりますが、打撃の破壊力はまさにそれです。より重い体の人間が打ち込んだ方が、打撃の威力は強いんです」

「急所を一撃で突けば勝負がひっくり返ることもあるでしょう？」

誰かが質問をすると、レスリング部員は首を振った。

「名古屋さんは腕も長いし、そもそもレンジが広いんです」

「レンジ？」

「間合い、といい換えてもいいです。つまり、自分が攻撃なり守備なりできる空間が、人と比べて広いんです。あの一年は」

と彼女が階下に目を移す。全員がその視線を追い、同級生二人ほどに囲まれ会話を交わしているらしい涉己を見る。

「相当動きは速そうですね、名古屋さんのロングレンジをかくぐって行けるような、そんな人間離れた動きはしないでしょ、いくらなんでも。急所を一撃といっても、難度が高すぎます」

「不可能、ではないわよね」

奈乃香が笑みを唇の端に乗せていう。半分冗談でいっているように見えたから、レスリング部員も簡単にうなずいた。

「もちろん、不可能じゃないです。難しすぎるっただけで」

「でも、その不可能を可能にしなければ彼女に勝機は無い、ということね」

「そうですね」

「彼女はその見込みがあると思っていますのでしょう。そうでもなければ、ああも落ち着いてはいられないわ」

側近がため息をつきたくなるほど美しい、気品あふれる笑みを浮かべ、奈乃香は両腕を抱くようにして背を伸ばした。

「勝敗はともかく、なぜ彼女がそこまで自信に満ちているか。その理由が知りたいわね。手合いが終わったら、さらに彼女に関する情報を徹底的に洗い出して。それから、何があっても負傷者を最高の条件で治療できる手配を」

側近たちが一斉に直立不動の姿勢を取り、「はいっ」と返した。

それでも涉己は狙ってくる、と名古屋は踏んでいる。

当たり前だった。それ以外に涉己が生き残る道は無い。

手合いの場合、どちらかが倒れるまで頑張る必要は無い。ある程

度實力を示すことが出来れば、降参してしまえばいい。実際、売名のためならそういうやり方もありで、負けはついてしまうが、最初からそれを折り込んでいればマイナスは無い。

自分相手に善戦し、あるいは善戦したように見せて両手を挙げれば、大したダメージも受けずに売名に成功できる。それをどう活かす気かはわからないが、過去、そういう相手もいた。

粉碎してきたが。

何を仕出かすかわからない不気味さはあるが、全力をもって叩き潰すだけだ。

目の前に涉己がいる。

平均身長からしたらやや大きいかもしれないが、体付きは決して大きくはない。華奢とっていいだろう。肩幅は少しがっちりした感じを受けるが、腰回りは脂肪が薄いから細く、残念なくらいに野暮つたい指定ジャージ越しに見る胸も、お世辞にも大きいとはいえない。

無表情に自分を見ている涉己を見ると、自分が力いっぱい殴れば本気で生死が危ぶまれる相手に思える。

「最後のお節介だ」

と、思わず口にしていた。

「いいんだな、本気でやるぞ」

視線の先で、涉己は相変わらず無表情に、肩だけをすくめた。

「むしろありがたいくらいだわ」

何があるがたいのか、そこまで聞く気は無い。あくまでやるというなら、力いっぱい叩き潰すだけだった。

「いいか、二人とも」

立会人の梶が太い声を出す。

「お互い握手を」

ボクシンググローブより軽く薄い専用グローブは、名古屋の拳を凶器にするだろう。その心細いほどの緩衝材を巻いた手で、二人は握手を交わした。

小さな手だった。

こんな凶暴が服を着て歩いているような男に彼女がいるはずもなく、女の手など久しく握ったことはなかったが、それにしても小さく感じる。

すぐ近くまで来た涉己の顔は相変わらずの無表情だが、その肌が意外にきれいなこと、目元の涼やかさや顔立ちの整い方が実は人並み以上である事に気付いた。

一撃だ。

手加減はしない。一撃で終わらせる。

名古屋は体中の筋肉という筋肉にいい聞かせるように念じた。

一撃必殺の拳を叩き込むのが一番彼女にとって幸福な敗北になる。そのためには、絶対に縮み込むな。最高の一撃を食らわせてやれ。

お互いの距離が７メートルを刻む。

「ファイト！」

梶の怒声が空気を引き裂いた。

二人はその場を動かなかった。

名古屋はゆっくりと両拳を上げ、ややガードを下げ気味にしたオースドックススタイルになる。いかにも様子見といった観のある、基本通りの構え。

涉己は右足を引いた状態でやや腰を落とし、左手を斜めに突き出している。中華拳法のような構えだが、右手をだらりと下げているのが特徴といえば特徴といえた。

しばらく睨み合いの様な姿勢になり、その分だけ周囲の緊張感が増した。ただでさえ張り詰めていた空気が、痛いほど静かな空間を作り上げていく。

その内、二人が同時に足を動かし始めた。

名古屋が軽くステップを踏み、涉己はすり足のようにして、それぞれ横に、あるいは前に、派手さの無い動きで進んでいく。

双方の距離が4メートルをきった時点で、空気が変わった。

名古屋のステップワークが一気に加速していた。

相手を軸にしてリング上で円を描くように動く、これもボクシングの基本中の基本。ただ、その速度が尋常ではなかった。

見ていたボクシング部員にはすぐにわかった。

新がうめく。

「部長、めちゃくちや本気じゃないか」

圧倒的なパワーボクシングを好む名古屋だが、相手が強いと見れば、基本に忠実なテクニカルボクシングでフィニッシュまで持つていく技術と狡猾さがある。

まるで相手をなめてかかっている、それは雄弁な証拠だった。

前後に、左右に、名古屋の大きな体が、重力から解き放たれたかのように自在に動き回る。軽量級の新ですら、こつも綺麗には動けないのではないか。

高速の左ジャブ（威力を下げたスピードパンチ）連打で相手を棒立ちにし、苦し紛れに打ってくる打撃を読んでのカウンター、あるいは利き腕である右ストレートを最適の条件で打ち込んでいくという戦法は、狂犬扱いされる男のやり口ではない。知性的で理性的で、基本に忠実であることの意味をしっかりと理解しているボクサーだけができることだ。

名古屋の動きはさらに加速し、両肩が波のような軌道を描いて動き始めた。同時にガードが上がる。顔の前まで両拳が上がり、砂煙を上げるような素早い動きとあいまって、まるで名古屋が涉己の一撃を警戒して隙を探っているようにすら見える。

見る者が見れば、それが高校生離れた高等技術の片鱗であることが伺えただろう。

一方で涉己は、相変わらずすり足で動いてはいるものの、その動きはごく少ない。

自分の左足を軸にして、常に正面に名古屋を置くように回っているだけだった。左手は斜め前に突き出し、右手をようやく握り、腰

の辺りまで持つてきているが、名古屋の動きから比べれば止まっているも同然、構えも無いも同然だった。

そして名古屋がずっと距離を詰めた。

リーチ、つまりパンチの射程距離が長い名古屋は、わずかに身を沈めるようにして軽いジャブを放つ。

正確に渉己の頭部を狙って放たれた拳は、空を切った。渉己がわずかに身をそらしたからだ。つまり、その程度の距離感で撃ってきたジャブということだ。

続けざまに名古屋のジャブが、角度を変えて撃ち込まれる。そのたびに渉己は避け、あるいは左手を上げて逸らすように受ける。

距離を測り、相手の出方を測り、相手の射程距離を測るための攻撃。あるいは、相手の体勢を崩していく序曲としての攻撃。

「どれだけの人間が気付いてるのかな」

ぼそつとつぶやいたのは、渉己のセコンドについている隆治だった。両腕を組んで立っているその姿は、勝負の行方に興味津々ではあっても、危機感にさいなまれている様子には見えない。

「名古屋先輩のジャブが高校生離れして上手いこと……」

ぱしいつと音がして、名古屋のジャブが渉己の左手でいなされる。

「……渉己がそれを完璧に封じ込めていることの意味」

「気付いてる人もいるでしょ」

そう小声で応じたのは、両手をぎゅっと握り締めて二人を見つめている美紀。

「少ないことを祈るけどね」

「たくさんいればいるほど、後が厄介か」

「そついうこと……あつ」

美紀が息を呑む。隆治も組んでいた腕に力がこもった。視線の先で、渉己の体が吹き飛んでいた。

それは、ジャブの中に織り交ぜられた左ストレートだったろうか。

一瞬足を止めた名古屋の一撃は、ジャブとは違い、多少でも腰の回転が乗った強力な一撃だった。

涉己のガードは一度も崩れておらず、まともに当たったジャブの無い状況でのこれは、まず一発当てて涉己の体勢を崩そうとしたものだったに違いない。いきなりフィニッシュに持ち込む気なら、強引に体をねじ込んででも、本来のフィニッシュブローである右のストリートを撃ち込んでいただろう。

それでも、涉己の体が浮いていた。

涉己なりにガードは完璧だった。どうしてそんなことが出来るのか、名古屋のどこから飛んでくるか予測しにくい高速ジャブの嵐の中で、涉己は紛れて飛んできた左ストリートを両手で受けていた。

正確には、ひじを絞り込んで立てた左手首に当てた右手の平で受け、肩も使って体全体で受け止めるようにしたのだが、それでも涉己の体が浮き、後方に飛んでいた。

名古屋はそれを追うべきだったかもしれない。が、彼はそれをせず、つい、と距離を取った。

涉己は吹き飛びはしたものの、バランスを崩さずに着地すると、衝撃に顔をゆがめながらも構えを戻した。

なぜ追わない、周囲から声が上がったのも無理は無いが、名古屋は「追えるわけが無いだろうが」と心の中で毒づいている。

ありやあわざとだ。

打撃の瞬間、涉己が腰を浮かせ気味にしていたことに名古屋は気付いていた。

自分から弾き飛ばされるようにしやがった。目的は何だ。衝撃を抜くためか。こっちが攻めにかかったところを迎え撃つつもりだったか。

マンガじゃあるまいし、自分から下がることで衝撃を抜くなどできるはずが無い。仮にやっただとしても、体が浮くような衝撃を受けた直後、体がバランスを取り戻すまでの間の無防備な時間帯、どうやったら自分の身を護れるのか。

あらかじめ、バランスを崩していても迎撃できる武器を持っているからそうしたに違いない。

とっさにそう判断したから、名古屋は距離をとった。

涉己は一瞬意外そうな顔をしていた。来ると思っていた攻撃が来なかったから、拍子抜けしたらしい。

この小娘、何をしようとしやがった。

改めて、涉己という少女の化け物ぶりが名古屋を震わせた。いくら半端なストレートとはいえ、あれを正面から受けてあの顔かよ、と。

「おもしれえ、おもしれえぞ小娘」

思わず、名古屋は口走っていた。

16 名古屋戦？

困ったわねえ。

渉己は少々辟易していた。

ここまで本気モードで来られたら、隙が見出せないじゃないのよ。名古屋がここまで自分を高く買い、本気も本気の実戦モードで来るとは、正直想像していなかったところだった。

これがあるから、と渉己は舌打ちしたい気分になった。

できるだけ相手が油断している状態で、情報が不足しているうちに、実力を出し切られる前に倒しておく。相手が名古屋ならこれは外せない戦略だった。

名古屋という怪物は、真正正銘の怪物に化ける前に倒す必要がある。それは隆治や美紀との共通認識で、だからこそ、最初の相手にボクシング部を選んでいた。

それがこうも慎重に、かつ大胆に來られてしまえば、せつかくの構想もリセットしなければならない。

高速ジャブで様子を見ながら、左ストレートも入れてきた。探りを入れつつ、これで崩れるようならそのまま一気にフィニッシュに持っていく気だった、たぶん。様子見であの威力だから、本気で右ストレート食らったら、ガードしていてもKO食らっておかしくない。

再び高速のフットワークを始める名古屋の姿を正面に捉えながら、渉己の頭が回転を始める。

今さらなめた攻撃しかけてくれそうにもないんだから、こっちもそういう攻撃に切り替えるか。どうする。あの動きを追っていくのは苦にならないとしても、ジャブから先の流れを捉えきるのは至難の業っぽいし。メイウェザー・ジュニアばりだもんね、あのスピードは。

不世出のスピード・スターと呼ばれるボクシング世界チャンピオ

ンの名前を思い浮かべつつ、渉己の頭はさらに回転速度を上げた。
まあ、なっちゃったもんは仕方ない。こっちもその分本気出せば
済む話だわ。でもどこまで出すかが問題だね。いつそ全開でいつ
た方がいいか。その方がかえって他の連中の目はごまかせるかもし
れない。だとしたら、どう攻める。

ごくごくわずかに、渉己の唇に笑みが浮かんだ。
やっちゃうか。全開も全開、ど本気の一発。

渉己の構えが変わった。

それまでとは逆、右手右足が前に来る半身の構え。手の位置も、
右手は軽く握って顔の前、左手は腰のすぐ近くにひきつけている。
腰の落とし方も違った。それまではごく自然に上体を起こし、そ
のまま下に重心を落とすような構えだったが、やや左足に重心をか
け、つまり後ろに重心を残す形で腰を落としていたから、ぱっと見
では右を蹴り足にするために構えているように感じられる。

名古屋はステップを再開すると、構えが変わった渉己にすかさず
ジャブを浴びせかける。

渉己はそれを器用にかわした。ステップが踏みやすい姿勢には見
えないのだが、すり足で音もなく動き、名古屋の鋭いジャブを避け、
あるいは手でいなし、頭や肩には一切触れさせない。

名古屋の動きが変わったのは、渉己が構えを変えて10秒ほどし
てからだろうか。

ジャブの際の踏み込みが、わずかに深くなった。距離を詰め始め
ている。

というより、渉己との間合いを詰め、渉己の横方向の動きを制し
始めていた。

いよいよ料理に入る気だ、と、格闘技経験が長い人間には直感で
きる動きだった。踏み込みは大きくなり、パンチは細くなり、肩
のウィービング（波のような動き）が強くなってきた。

来る。

そう人々が思った瞬間だった。

逆の方向から、それは来た。

涉己が突然、見ている側にとっては何の脈絡もなく、名古屋のジヤブをいなすかいなさないかのタイミングで、名古屋が拳を引くスピードよりもあるいは速いくらいの驚くべき速度で、弾丸のように飛び出していた。

元々間合いは涉己自身の間合いからは随分離れている。思い切つて飛び出す必要はあったのかもしれないが、この速さは異常だった。名古屋はさすがに慌てなかった。涉己が速いことは百も承知だ。ジヤブを引つ込めると同時にガードする体勢は出来ているし、小柄な涉己が腹部狙いであろう事も見越して、とっさに頭から肩を下げてガードを固めている。左のガードが間に合わなくても、右腕はもともとしっかり防御に回している。

ガードさえきちんとしていれば、どんなに強力なパンチが来ようと耐えられる。ボクシングとはそういう競技だし、グローブが薄く小さいこのルール下でも、その大原則に揺るぎは無いはずだった。一撃当てて、涉己の動きが止まった瞬間が、彼女にとっての最大のピンチになる。名古屋にとっての絶好のチャンスになる。

それがわかっていればこそ、名古屋は最高のガードで迎え撃とうとした。次の一撃で必ず彼女を屠ると決意して。

涉己がどう動いたか、いくら速いとはいえ、名古屋には見えていた。

右手が前の構えから、ジヤブをかわすように左の半身に切り替え、同時に飛び出した涉己は、右、左と脚を進めて三歩目の右足を大きく踏み込んだ。同時に姿勢を低くし、体を完全に横向きにした状態で両手を撃ち合わせ、凄まじい速度で開いた。

名古屋がたたらを踏んでいた。

なんだこれは、と名古屋自身が思う暇もなかった。

両腕がしびれて感覚を失うほどの衝撃を受け、上半身が吹き飛びそうになるのを頑健な下半身で支えはしたものの、バランスを完全に失っているから、とつさに何も出来ない。

自分が、涉己にガードごと吹き飛ばされるような掌底突きを食らったのだということに気付くまでの半秒、いまだかつてボクシングの試合中に受けた経験が無いほどの爆発的な力の前に、名古屋はただ姿勢を維持しようと集中する以外に何も出来なかった。

それは打撃、という感覚ではなかった。打たれた瞬間に感じる腕への衝撃は、大したものではなかった。どんなに頑張ったって、体重50キログラム前後程度の女子が片手で打ち込める打撃の破壊力など、たかがしれている。

だが、当てられてからの衝撃は、まるで波のように名古屋の両腕のガードを押し破り、掌底がまるで押し当てられてから加速しているかのように、彼の巨体を揺るがした。

涉己は自分の手の平が名古屋を揺るがすと同時にさらに次の動きに移っている。

大きく開いた両足で支えていた上体を、ふっと浮き上がるようにそらせると、腰を回転させるようにして左足を前に出す。たたらを踏んで後退しかけていた名古屋の動きと重ね合わせるような速度だから、ごく近い双方の距離は変わらない。

衝撃を受けて両腕の感覚が一時的に飛んでいる名古屋が、どうすればいいかとつさに判断できない、そのごくわずかな時間の中で、涉己はさらに右足を一歩進めていた。名古屋の視界に涉己の姿が大写しになり、反射的に名古屋の拳が涉己の頭部を狙って突き出された。

今度は大きく踏み込まない。上体を倒し気味に小さく鋭く左足を踏み込んだ涉己は、名古屋の苦し紛れの左拳を紙一重でかいくぐり、これ見よがしなほどに腰の回転を加えた右拳を、名古屋の側頭部に

叩き込んだ。

派手な音がして、名古屋の頭が振れる。

ただし、大した破壊力は無い。

見た目も音も派手だが、何しろ体格差がありすぎる。涉己が振り抜いた先に名古屋の頭があるから、届く前にパンチの威力は減衰してしまっている。

が、それを名古屋が意識する時間はなかった。それは、涉己の超高速コンビネーションの序章に過ぎなかったからだ。

涉己がわざとらしいほど腰を振ったのは、次からの攻撃への「溜め」を作っていたに過ぎない。

その溜めから、正確に名古屋のリバー（肝臓）を打ち抜く左拳が放たれ、ガードが崩れかかるのを見越していたかのように右拳が名古屋のあごを襲う。

とつさにあごをガードした彼のリバーにもう一撃、涉己の拳が叩き込まれ、その勢いで身を低くした涉己の右が、ガードの下から名古屋のみぞおちを撃ち抜く。

一撃一撃が、恐ろしく重い。

二年のエース、日比谷新も、体格の割には重いパンチを持っているが、彼の比ではない。グローブがボクシングではありえないほど小さく薄い素材だから、という理由もあるだろうが、それにしても、涉己のサイズから考えればありえない重さで名古屋を打ちのめす。

そして、わずかな間に一気に蓄積されたダメージに、名古屋の上部が完全にバランスを崩したその瞬間、彼の足の間に右足を振り下ろすほどの近距離で、涉己の強烈な踏み込みが地面を揺らした。

まずい、と思っても、体が反応しない。

名古屋の思考と、涉己の打撃のどちらが速かったか。

最後のみぞおち撃ちで溜めを使いきった涉己の体は、踏み込んだ時点でひねりも何も無いフラットな状態になっていた。そこから、踏み込みによって右前の半身になった体勢で、涉己は肩を名古屋の両腕を跳ね上げるようにねじ込み、左拳を右手で包むようにしながら

ら、右ひじを突き出した。

強烈な踏み込みのパワーがそのまま伝わってきたかとも思える一撃を受け、名古屋の体は凄まじい衝撃の中で折れ、頭が自然に下がってくる。

涉己の攻撃はまだ終わってはいなかった。

右ひじを引く、それよりわずかに速く引いた左拳が、小さく一閃していた。楕円を描くような軌道でひねりを加えながら撃たれた拳は、吹き飛ばうとする名古屋のあごの辺りを捉えていた。

時系列で書けばこのようになるが、それも一瞬のことである。この一連の動作が見えていた者が、大勢のギャラリイの中に一人でもいたかどうか。

人々に見えたのは、名古屋の大きな体の中に埋まりこむように踏み込んだ涉己が、次の瞬間にはその巨体を文字通り吹き飛ばしているという、現実離れしすぎて映画のワンシーンのようにも感じられる光景だった。

そして、最後の左拳で脳を揺らされた名古屋の意識は、内臓という内蔵が一斉に飛び跳ねている上半身のダメージも加わり、きれいに途切れていた。

たたらを踏むほどの余力もなく、吹き飛んだ名古屋の体は、そのまま力なく倒れこんだ。

ずしん、という重い音と共に崩れ落ちた名古屋は、焦点を失ったまま開けられた目で虚空を見つめ、短時間で溜め込まれた巨大なダメージのためか、呼吸すら出来ずに打ち跳ねていた。

涉己は残心を取るように静かに構えを取り、それから数歩音も無く下がると、構えを解いて棒立ちになった。

そして口を開く。

「……立会人さん、早く介抱してあげないと危ないよ」

梶を始め、周囲の人々はこの声で我に返った。

「あ……ああ、名古屋和博は試合続行不可能と認め、勝者、岩崎渉己！」

最低限のことを告げ、梶は大慌てで倒れている名古屋に駆け寄っていた。

どよめきが歓声に爆発するまで、時間はそうかからなかった。

付近の校舎が揺れているのではないかというほどの大歓声に包まれる中、渉己はしばらく凝然と立ち続けていた。

視線の先には名古屋とそれを介抱するスタッフたちがいる。

隆治と美紀がその隣に並び、じつと一緒に立ちつくした。

そうしていると、渉己はやはり目立たない、地味な、どうしても場にいるのか納得するのに苦労するような細い存在感しかない女子生徒だった。隣にいる男女が校内でも有名な美形なだけに、なおさら。

その内、名古屋がまともに呼吸できるようになり、起き上がれないまでも意識が多少は戻り、目の焦点も合うようになってきた様子を見届けると、渉己は無表情なまま一礼し、くるりと背を向けた。

興奮して渉己に握手を求めたり抱きついてこようとする生徒に目もくれず、あるいは氷の刃を突き刺すような視線を送りつつ、渉己はてくてくと、これまた特徴の無い歩き方で会場から去っていった。

17 思惑

騒ぎが一応収まり、下校する生徒も増え始めた頃、「女王陛下の執務室」などとも呼ばれる文化部連合の事務局では、多数集まってくる情報の整理に追われる生徒達の喧騒がピークに達していた。

その中で、女王陛下だけが窓際にいすを置き、物憂げに脚を組んで座っていた。すぐそばには、いつもは未決書類やファイルを置くために使っているキャスター付きの小棚があり、その上にノートパソコンを置いていた。画面は彼女にしか見えない角度に開いていて、時々タッチパネルに指を這わせている。

画面上、涉己と名古屋の手合いが、計4つのカメラで撮影されていた、そのそれぞれのファイルが表示されている。

とんでもない偉材が埋もれていたというわけね。

ため息と共に思う。

まったく、あんな戦いを誰が想像できただろうか。

日比野新を倒すだろう事は予測の範囲内だったし、その結果として名古屋が出てくるだろう事も、いわば既定の路線だった。その後彼女がどう出るかは未知の範囲だったが、少なくとも一年生の小娘に名古屋が敗れるなど、誰も想像だにしていなかったことだった。しかも、あの強烈極まりない勝ち方。

日比谷戦で見せた投げから関節技という流れは、古流柔術の系譜を引くという「武零流」道場に通っているという情報から推測は出来たし、納得も出来る。

だが、あの大きな体を吹き飛ばす掌底突き威力といい、そこに至るまでの組み立てといい、その後のたたみかけといい、最後のひじ撃ちからとどめのフックに至る速さと正確さといい、何もかもが規格外で、常識外で、破天荒にも程があった。

実際、そばで見えていた女子レスリング部の幹部も、各所で観察していた部下達も、何か起きたか、その時点ではまったく理解できて

いなかった。映像データが集まって、それを総がかりでチェックしていても、何が起きたかは理解できても、なぜそれができたか、なぜそれができるのかについては、誰もが沈黙した。

「破壊力は重量かける加速度の二乗に比例する、だったはずよね」

検討中、秘書役が皮肉っぽく答えていた。解説役のレスリング部幹部はそれ以上に皮肉っぽく答えていた。

「打突の瞬間の衝撃という意味ではね。でも、力の伝達という意味でいうなら、別の方程式が成り立つわ」

「そんなこと、事前にはいつてなかったじゃない」

「そんな方程式が必要な打突ができる人間がいるなんて、想像してなかったのよ」

奈乃香は一切口を出さなかった口論だが、こうして一人で考えていると、何となくわかる気はする。

ボクシングに限らず、殴る、あるいは蹴るという行為は、相手の体に衝撃を与え、ダメージを負わせる事を目的とする。

それを物理的に測ろうとするときに運動エネルギーを用いようとする気持ちはわかるが、要素をいくつか取りこぼしているから計算が成り立たなくなる。

まずは時間の要素よね。

スローで繰り返し再生にしている画面を見ながら、奈乃香はつぶやいた。

単純に、拳や掌底突きは、インパクトの瞬間だけ対象に触れているわけではない。物を押そうとするとき、人間は大抵、触れた瞬間よりも、それ以降の時間帯に最大限の力を入れるものだ。打撃に見えた涉己の掌底突きが、実はそのような性質のものだったとしたら、インパクトの瞬間の運動エネルギーを見ても仕方が無い。

「それこそ力学の世界よね……微積分で力の分布から計算し直さないと」

もっといえ、破壊力にはもうひとつ大事な要素がある。奈乃香はそれにも気付いた。

「……それから面積もね」

仕事量が同じ場合、作用面の面積が小さければ小さいほど、かかってくる圧力が大きくなるというのは、中学生で習う程度の、ごくごく初歩の力学だ。グローブが小さく、しかも元々の手が小さいとなれば、重量が少ない人間の打撃でも、打突部位にかかってくる力は、実は重量級選手が大きなグローブで当ててくる力と大して変わらないということもありえる。

「まあ、そんなのはどうでもいいことか」

窓の外から入り込んできた風に揺れた髪をかきあげながら、奈乃香はふつと苦笑した。

そんな物理量の推測など、なにがしかのオタクの理系学生にでもやらせておけばいい。ちよつと褒めてやれば、周囲がどん引きしても血を吐くまで結果を追求するだろう。そういう人種の心当たりはいくらでもある。

それより大事なものは、これからどのように涉己という存在を利用していくか、だった。

格闘系運動部間の抗争劇を、力の均衡を演出することで抑制し、校内に一定の平和を作り上げたのは奈乃香自身である。

校内平和の維持。

それが奈乃香が女王として君臨する唯一の理由であり、目的だった。

彼女が苦勞して築き上げたバランスオブパワーを、涉己の存在で突き崩されるわけにはいかなかった。

ボクシング部、空手部、中華拳法部、柔道部、そして文化部連合という五大勢力のパワーバランスを舵取りし、それらに属していない勢力を極力抗争劇から排除し、秦が丘高校のデリケートな平和は維持されている。

第一次世界大戦前のヨーロッパ、イギリス・フランス・ドイツ・オーストリア・イタリア・ロシアなどの列強諸国が、微妙な政治バランスを保ちながら一世紀近い擬似的平和を維持した時期があった。

歴史上、その体制をバランスオブパワーと呼び、アメリカがその絶大な力をもってヨーロッパ大陸に乗り込んでくるまで、あるいは絶対王政以降のヨーロッパには形式以上には存在しなかった「正義」という概念の外交政策で世界を圧倒するまで、理想的な外交政策の一つとしてヨーロッパを支配していた。

それが正しいやり方かどうかは、奈乃香の知ったことではない。これでしか、秦が丘に平和はもたらせなかった。

そう思っているし、これからもそれを維持していくことが自分の義務だと思っていた。

今さら、それ以前の秦が丘に戻してたまるものか。

もし岩崎涉己という存在が、このバランスを覆すような存在だとしたら。

その時は闇討ちだろうが退学処分だろうが、自分に出来る限りのあらゆる手段を用いて排除する。汚いとか、卑怯とか、そんな概念は犬にでも食わせてしまえばいい。

自分がいる限りは好きにはさせない。この平和は私が守りぬく。

奈乃香は何度も繰り返される涉己の凄まじい戦いぶりの映像を消し、ノートパソコンをたたんだ。

その力、うらやましいわ。私には無いもの、望んでも決して手に入らないもの。でも、一人の力で維持できる平和には限界がある。

あなたがどんなに強かろうが、その力でついには校内の覇権を握り平和を作ったとしても、あなたが怪我でもしてその力を失った瞬間、その平和は崩れてしまうのよ。

「秦が丘にアレクサンダーは要らないわ」

そうつぶやき、奈乃香は目を閉じた。

圧倒的な才能でギリシア以东の古代世界を切り従えたアレクサンダー、あるいはアレクサンドロス大王は、獲得領域が頂点に達したところで病に倒れた。彼は後継者を持たなかったから、大王の死後、巨大な帝国は分裂し、泥沼の抗争劇に陥った。彼一人の才能で切り拓かれた帝国は、彼の死により一瞬で崩壊した。

涉己の才能がそこまでのものかどうかはわからない。名古屋は倒したが、この学校には彼以上と目される格闘家がまだまだ存在する。それらに勝ち続けられるとは思えないし、彼らが涉己対策のためだけに手を組み、袋叩きにする事だって考えられる。なにより、彼女には自分以外に勢力というものが無い。

そんな不安定な存在に、校内をかき回されたくはないというのが、奈乃香の正直な想いだっただ。

いつそ取り込んでしまえばいいか。文化部連合の貴重なエースとして。

閉じていた目を開け、奈乃香は窓の外を見る。

日が長い時期だから、まだ太陽は沈むそぶりを見せない。一時間ほど前まで興奮しきったギャラリーで埋まっていたスペースには、もうその残滓すら残ってはいなかったが、熱気のようなものが何となく感じられるのは、奈乃香の胸にも、あの戦いの異常な光景が、はつきりと衝撃として刻まれていたからかもしれない。

自分がアレクサンドロス大王に例えられているとも知らない涉己は、着替えもしないで野暮ったい指定ジャージのままさっさと下校すると、そのまま道場に向かっていた。

護衛役の隆治も一緒だ。

「いよいよデビュー達成だな」

隆治は気楽な声を出している。涉己が無表情に見返すと、どこまでもお気楽な表情をしている。本当に気楽にいつているに違いない。

「待たせたわね」

不機嫌そうに涉己がいうと、隆治はこっくりとうなずいた。

「待った待った。何年待ったよ」

涉己はそれには答えず、どう見ても晴れた6月の夕方に着ているには暑苦しいジャージの袖で額の汗を拭いている。脱げば良さそう

なものだが、むしろ汗をかくために着ているらしい。

「ま、これであれだな、白昼堂々喧嘩が出来るってもんだ」

「したかったの？」

「別にしたくは無いけどさ、売られた喧嘩をひたすら流してすごすつてのも、結構精神的にはきついじゃんか」

「まあねえ」

強烈な目的意識があるとはいえ、明らかに自分より弱い連中に侮られ、馬鹿にされてきたこれまでの日々の記憶は、決して甘いものではない。隆治も色々と溜まっていたのだろうし、道場でそれをいくら発散したところで、「こんな奴ら、二秒で転がせるのに」と歯噛みした記憶というものは、なかなか消えてくれるようなものでもない。

「それに、どうせ状況によっちゃどうしたって避けられない手合いや喧嘩だつて出てくるだろ？」

「出るだろうね」

「俺は陰でこそそやってるのが性に合ってるけどさ、一度おおっぴらにやる喧嘩つてのも体験してみたいんだよな」

「んなこというなら、名古屋相手も引き受けてくれりゃ良かったじやんか」

「やだよ、あんな化け物」

「化け物退治は私にさせるわけね」

「当たり前だろ、お前は俺より百倍強いんだから」

「嘘つけ、手抜きさえしなきゃ私の千倍強いくせに」

「冗談だろ、師範代様」

「殴るよ」

そこまでいうと、涉己は拳を胸元まで上げる。隆治は大げさに手を上げた。

「ギブギブ」

「ったく」

歩いているのは数年前に新しく通った街路で、歩道が広い。肩を

並べて歩いていても、誰かの邪魔になることはなかった。

二人の会話は、自然にこれからのことに移っていく。

「バランスオブパワー、勢力均衡が成り立ってるのはね、一人の力によるんだよ」

「女王陛下か？」

「そ」

「涉己はうなずいた。こういう話をしているときの涉己は、目に力があつて、理性的で、ぐつと大人っぽくなる。学校では普段絶対に見せない顔。」

「柳澤奈乃香さん、彼女が均衡を作り上げ、固定したのね。それは凄いいことだけどさ、残念ながらあの人がいなくなったらそれでおしまい。一度崩れたら、なまじ列強同士の力が接近してるから、目も当てられない紛争になるね。それこそ、歴史上のバランスオブパワーが崩壊した後みたく」

「どこかが覇権握ればいいけど、できなきや総力戦で焦土と化すか」
「それじゃ困る。あの人は平和を維持するにはこれしかないって思ってるだろうけど、個人の力に依存したシステムなんてのはね、長い間の平和維持には適してないのよ」

「女王陛下は頭もいいんだし、その辺は気付いてても良さそうなものだけだな」

「表面上は民主的に進んでもん、それは無理よ。女王陛下は多分、自分は作り上げた平和維持のシステムに乗っかってるだけだと思ってるわ。実は民主的に見えるあのシステムそのものが、女王陛下の上に乗っかって出来てるんだだけだね」

「当事者だから気付かないか」

「多分ね。まあ、その内に嫌でもわかると思うけど」

会話がとても高校一年生のものとは思えないが、本人達は別に気負いこんで難しい話をしている自覚は無い。

「とにかく」

と、隆治はそろそろ見えてきた道場に視線を向けながら、話をま

とめにかかった。

「校内平和体制の確立、なんてのは、俺達にとっちゃ途中経過もいいところだ。とっとと仕上げるに限るな」

渉己はうなずいた。

「もたもたしてる暇は無いわ。急ぎすぎてガタガタの体制になっても仕方ないけど、夏休みまでにはかつちり型にはめていく」

18 ボクシング部前

校内の抗争劇は、格闘系体育部間の争いがメインだが、もちろんそれだけではない。

自分の面子を保つため、自己顕示欲を満たすため、様々な理由で争いは生じていたし、格闘系体育部の有力者を倒して名を上げようとする者も少なからずいた。

今、名古屋の目の前に転がっている肉の固まりも、その一部だろう。

無名の一年女子に完敗を喫した次の日、名古屋は登校する途中、ひと気がなくなる辺りで数人の男子生徒に襲われた。

相手は金属バットや鉄パイプで武装していて、名古屋を背後から不意討ちにしようとした。秦が丘校内の抗争では不意討ちは禁止事項だし、武器を使うなどありえないことだから、もとより彼らに正当な抗争の手順を踏む気など無いことがわかる。

その襲撃は失敗した。理由は簡単で、名古屋が気付いたからだ。ひと気がない場所だから静かで、彼らの動きはそれなりの音になり、名古屋の危機回避の本能を刺激した。

反射神経や動体視力の良さなど、格闘家としての地力に定評ある名古屋である。気付いてさえしまえば、素人臭い力任せの攻撃など、問題にならなかった。

初撃をほとんど本能だけで辛うじてよけると、殺到するバットや鉄パイプをボクシングテクニックで避けながら、名古屋はすぐに体勢を立て直した。

立て直してしまえば、不意討ちの初撃で仕留められないような間抜けに苦労するような、可愛いげのある男ではない。ものの数分で、名古屋の目の前に数個の肉のかたまりが転がることになった。

最後の相手を強烈なボディ打ちで悶絶させた頃には、襲撃者の正体も思い出していた。

確か、最近秦が丘の街で幅をきかせているラッパ―崩れのチンピラがいて、それについてまわるグループにこの連中がいたはずだ。

校内抗争が忙しい秦が丘高校の喧嘩巧者たちは、おかげで街の勢力争いまで構っている余裕が無い。チンピラがどう立ち回ろうと、いちいち目くじらを立てている暇はないし、そもそも眼中に入っていない。

そんなつまらん連中に目をつけられたか。俺も随分なめられたもんだな。

あの敗北のおかげでこうなったことくらい、考えるまでもなくわかる。名古屋は忌々しげに音高く舌打ちした。

名古屋の敗北は、さすがに全校を揺るがす衝撃を与えた。

化け物じみた強さと狡猾さで、列強と呼ばれる格闘部の中では最も部員数が少ないボクシング部を、最も危険で要注意な部にしていた名古屋が、こうも呆気なく倒されるなど、誰一人想像していなかったからだ。

よほど惨憺な顔つきをしていたのか、岩崎渉己との決戦の翌日、彼に話しかけてくるようなバカはいなかった。その点は気が楽だったが、それで名古屋の気が晴れるわけでも無い。

怪我はしていたが、程度は不思議なほど大したことがなかった。打突をまともに受けた跡にアザは浮かんでいたが、ボクシングで激しい試合をした翌日のダメージに比べれば、無いに等しい。

それは、岩崎渉己の攻撃が、きわめて効率的に名古屋の急所を射抜き、力を奪い去った証明でもあった。

倒されたことも衝撃的だったが、その倒され方が、名古屋にとってはさらに衝撃的だった。

こんなことが人間に出来るのか。一体どれだけの力の差が、俺とあの小娘との間にあるというのか。

俺は、自分で思っている以上に弱いんじゃないのか。

その疑念が、名古屋から根こそぎ自信を奪い去ろうとしていた、そのタイミングで、バカな連中がわざわざ不意打ちで彼に襲いかかってくれた。

それを簡単に転がすことができた名古屋は、かろうじて最低限のプライドは拾い上げられた。

少なくとも、バカな高校生数人くらいなら簡単に返り討ちできる程度の力はある。俺はただの女子高生に倒されてしまうほど極端に弱い訳じゃない。

じゃあ、あの小娘はなんなんだ。

名古屋の思いがそこに至るのは当然の話で、あの地味で存在感の薄い、意外に顔立ちそのものはきれいだったことくらいしか思い出すのが難しいようなあの少女の正体、あるいは実力のほどを知りたいと願い始めるのも、また当然の話だった。

不意打ちを受けたその日の昼休み、名古屋はボクシング部の部室に向かった。

名古屋の敗北は、当然だがボクシング部に深刻なダメージを与えた。

絶対的なボスだった名古屋がショッキングな敗れ方をしたことで、部員たちに動揺が広がっていた。

ずっと一緒に戦ってきた副部長や、同じ相手に手も無く敗れていた二年の日比野新辺りは、その動揺を抑えるために懸命に動いてくれていたが、負け方があまりにも印象的すぎて、万全からは程遠い状態だった。

その状況下で、不意打ちを狙った連中と同じような発想で道場破りを仕掛けてくる非列強グループもいないとは限らない。他が頼りになりそうもない今、彼自身が矢面に立って防壁にならなければ、ボクシング部は本当に壊滅の危機を迎えることになってしまう。

ボロボロのプライドを身にまとったまま、名古屋はボクシング

部の練習場と、そのとなりにある部室に入ろうとした。

時間は昼休みが始まって10分と少し。

部室前の光景に、名古屋は思わず立ち止まり、目を睜^{みは}った。

列強外の小勢力で、いつもボクシング部や中華拳法部に対抗しようと無茶を仕掛けてくる部があった。名古屋は列強の柔道部が裏で動いているのではないかとにらんでいるのだが、最近特にうるさいのが「琉球^{からて}唐手同好会」だった。

列強の空手部は正統派の空手を看板に掲げ、きちんと連盟にも加盟してまともに運営されているが、唐手同好会はそうではない。空手発祥の地である「琉球」を謳いながら、やっていることは「喧嘩空手」でしかなく、型の徹底や精神の鍛練を主とする琉球の空手とは似ても似つかないものだった。

列強の空手部は彼らを嫌い、嫌い抜いたあげく相手にしないことにしていた。

唐手同好会も本家との抗争は避けているようで、矛先は、列強の中でも部員数が比較的少ないボクシング部と中華拳法部に向けられた。その唐手同好会の主力メンバーが、ボクシング部の練習場の入り口付近にバタバタと倒れていた。

どれもたいしたダメージがあるようにも見えなかったが、まともに立ち上げられるほど余裕がある者はいないようで、地面に転がったままうめいたり、「ちくしょう」と土を握りしめたりしている。

一体誰が、と名古屋はそれに近寄りながら首をかしげた。

乱闘を演じるならともかく、競技としての空手より喧嘩の武器としての格闘技に特化した唐手同好会の連中相手に、ここまで鮮やかな勝ちを収めきる人間に、自分以外の心当たりがなかった。

疑問はすぐに氷解した。

練習場の入り口からさらに一人、同好会最強とされる会長が吹き飛ばされるように飛び出してきて、その後からゆっくり、小柄な人間が出てきた。

相変わらずもっさりとした校則順守の制服を着た、地味な女子生

徒。変わったところといえば、拳を守るためだろう、手合いで使う薄手のグローブを両手につけていることくらいだろうか。

岩崎渉己が、そこにいた。

無表情に唐手同好会の面々を見下ろすその姿には、迫力すら感じない。力感に欠け、凶暴さなど微塵も漂わせないその目立たない雰囲気は、かえってその光景の異様さを際立たせていた。

名古屋は、憎むべき敵であるはずの渉己のその姿に、怒ったり敵意を燃やしたりするより先に、苦笑してしまった。

「なにをやってやがんだ、岩崎」

名古屋の問いかけに、渉己は表情も変えずに答えた。

「お掃除」

周囲のうめき声に混じって聞こえたその声は、現実感の無い風景をさらに現実感の欠けた風景に感じさせてくれた。

19 名古屋、動揺する

「火事場泥棒みたいな真似するやつら、嫌いなんだよね」

涉己は、窓を全開にしたボクシング部練習場のベンチにちょこんと座り、ミネラルウォーターのミニペットボトルから一口水を飲むと、至って穏やかな調子でそういった。

ついさっき、あり得ないほどに強烈な対集団戦をやらかしておきながら、その表情はのどかさえ感じさせる。わざとやっているなら、大した演技派だ。

「火事場泥棒か」

「そうでしょ？ 私が倒したボクシング部を、ほとぼりも冷めない内に襲うとか、まんま火事場泥棒じゃない」

字面で見ると結構怒っていきそうだが、口調がのんびりしているから緊張感がまるで無い。

名古屋もついつられて、怨敵出現に殺気立ちかけた神経が、すっかり鎮まってしまった。

「しかも、あの対戦を見て、先輩の実力を見くびって仕掛けてくるとか、もうどれだけバカなんだか」

「バカか」

「バカでしょ。私がカケラも本気出さなくても殲滅できちゃう程度のゴミ虫集団が、私が本気で倒しにいったやつと仕留めた相手を襲おうとか。襲う相手の実力も計れないやつらなんて、バカ以外呼びようがないわ」

「手厳しいな」

名古屋は苦笑した。涉己はのんびりした口調を変えもせず、ミネラルウォーターをもう一口含み、飲み込みながらそのボトルを傾けた。

透明な水がわずかに光を弾きながら一筋落ちていき、やがて、練習場の床にうつぶせに転がっている男のほほに当たってはねた。

水をかけられた男は、その刺激に体を固くしたが、両手の親指をプラスチックの細いバンドで後ろ手に縛られ、足首を自分のネクタイで縛られ、口の中に自分の靴下をねじ込まれたあげくガムテープでふさがれてしまっていては、それ以上の抗議もできない。鼻でうめくのが精一杯だった。

唐手同好会の会長、この騒ぎの主犯者である。

ボクシング部を直接襲撃して、一気に列強の座に駆け上ろうとしないなぜかボクシング部と敵対しているはずの涉己に完膚無きまでに叩きのめされ、他のメンバーまで拘束するのを面倒臭がった涉己のおかげで、ひとりでボクシング部の練習場の床に転がる羽目になった。彼を縛り上げる涉己の手際の良さは呆れたもので、見ていた名古屋が感心したくらいだった。特に、ケーブルなどをまとめるときによく使われる、細いプラスチックバンドを出して親指を結び、がちりと拘束してみせた鮮やかさは、あらかじめこれあるを予期して準備していたことといい、油断ならない少女という印象を一層強くさせる。

顔さえ見なければ、だが。

顔を見てしまえば、涉己はやはり地味で目立たない、野暮ったさが板についた、凄みなど感じようもない女子高生に過ぎない。

「で、そんなバカを駆逐するために、こんなところまでわざわざお越し下さったわけか」

すっかり毒気を抜かれてしまった名古屋が皮肉っぽく問いかけると、涉己は無表情なまま首を振った。

「まさか。それも目的のひとつではあるけど、メインは別」

「それでも、ひとつではあるのか」

「だって、あんなバカの集団が出てくることくらいは読めるでしょ。だから先輩も、いつもは昼休みになんて絶対来ないここに来たんですよ？」

「まあ、そつだ」

「唐手同好会かムエタイ同好会か、どっちかだろうとは思ってたん

だ」

「ずいぶん調べてるんだな」

名古屋が苦笑混じりにいうと、渉己はしれっと答えた。

「これから自分の覇権下に置くんだから、そりゃ調べるわ」

覇権下に、という言葉に、名古屋は思わず渉己の顔を見直した。

見られた方の渉己は、眉ひとつ動かすこともなく、名古屋を見返している。

「今さら驚くことでもないでしょ？ きっかけは偶然でも、ボクシング部から手をつけたのは、狙ってやったことよ」

「どういうことだ」

さすがに名古屋は眉間にしわをよせ、凄むように渉己に迫った。

渉己は泰然として椅子に座り続け、揺るがない。

「私はね」

真正面から名古屋の強烈な視線を受け止め、平然と言葉を重ねていく。

「この学校を平和にしなきゃいけないの。今の状況って、私にとってはすごく邪魔なの。この学校には早く平和になってももらわないと困るの。列強がどうか、バランスオブパワーがどうか、バカじゃないのって思うのね」

淡々と語る、その冷静さがこわい。

「ほっとくと誰も校内を平和にしてくれそうにないし、したければ自分で覇権握るのが一番手っ取り早そうだから。先輩も、今までできなかったし、正直、これから難しそうですよ？」

真正面からいきなりいわれ、名古屋は答えに詰まった。

確かに彼は覇権を握ることはできなかったし、握る見込みもなかった。握る力があるという確かな自信があるわけでもない。

名古屋は仕方なく頷いた。少なくとも渉己の発言は事実だし、渉己の口調も、ただ事実を指摘しただけで、喧嘩を売る気配は微塵もない。

「だから、私が取りに行く」

いいながら、渉己はスカートのひざを軽くつまみながら足を組んだ。組み終わるとそのひざに手を組んで置く。

「その一番の障害になるのが一部の天才の存在。私もかなり強いけど、ウェートの差はやっぱりきつい。ウェートで私に差をつけていて、しかも天賦の素質を持ってる相手なんて、早めに潰すに限るわ」
まっすぐ名古屋の目を射抜くように視線を据えた渉己は、少し間を空けて言葉を続けた。

「……先輩、あんたは力の使い方を知らないだけ。磨かれてないだけ。鍛え方を変えて、ちよっと技術を身に付けたら、途方もなく強くなるわ」

「……いつてくれるじゃないか」

名古屋はなんとか口を開いたが、それが精一杯の強がりだった。口の中がいつの間にか干上がり、自分が緊張していることに気付く。握った拳に汗の気配を感じた。

「いうわよ。もったいないもん。せつかく素質を持ってる人が、開花もさせずに埋もれかかってるんだから」

「俺がボクシングしてるのが間違いだっていいいたいのか」

「そうじゃないよ。いつてるでしょ、鍛え方を間違えてるの」

渉己はそういうと、スカートのポケットから携帯を取り出した。ストラップの類が一切無い、色気も何もない黒の折り畳み型。

「メアドちょうだい。住所送るから、放課後來てよ」

急な展開に名古屋が戸惑っていると、渉己は言葉を継いだ。

「まずは私が何者か、知つとくといいわ。心配しなくても取って食いはしないから」

放課後までの午後の授業は、ただでさえ常に上の空で聞き流している名古屋には、ほとんど存在すらしていない時間になった。単位だけはとっておかないとフォローが効かないから出席はしたが、内

容どころか、教壇に誰が立っていたかすら記憶にない。

授業が終わると、わずかにどうすべきか迷った。

部室で、唐手同好会の連中のようなバカを待ち受けていた方がいいのか、涉己の招待に応じた方がいいのか。

たいした時間は迷わなかった。

部室に行つて、いまだに拘束されたまま動けずに転がっているはずの唐手同好会の会長を見るのも、楽しみではある。彼の姿を見て驚いている部員の顔を見る楽しみもある。

が、今は、あの謎が多すぎる少女の情報がひどく大切な気がした。根拠もなく、名古屋を「もったいない」などと評するような、そんな安直な女ではない気がした。

携帯に届いたメールは、想像していた通り極めて簡潔なもので、住所以外一文字も追加や装飾がない。それをコピーして地図のサイトに飛び、表示させると、学校から10キロほど離れた場所が表示された。

確か駅からバスが出ていたはずだな、と記憶をたどる名古屋には、もう迷いはなかった。

ホームルームが終わり、放課後になると、一直線に玄関に向かい、そのまま校門をくぐる。

走り出しそうになるくらいの気持ちの高ぶりに襲われながら、そんな自分のおかしさに気付くこともなく、名古屋はまっすぐ指定の場所に向かった。

名古屋が乗り込んだバスは、秦が丘の街を縦断し、北の外れにある再開発地域に乗り入れていった。周囲は雑木林と新興住宅区域とが交互に姿を表す土地で、やがてたどりついたのは、きれいに手入れされた生垣に囲まれた一画だった。

バスを降りると、指定の場所には、土地自体はそれほど広くはないが、その区画を埋めるように大きな二階建ての建物が鎮座していた。

正面に回ると大きな玄関が名古屋を迎えた。その引き戸の上には、

墨痕鮮やかに「武零流秦が丘道場」と大きく筆書きされた木の看板がかかっている。

そして、その閉じられた引き戸の奥からは、誰が聞いてもわかる、武道系の高低入り交じった、気合いの声が漏れ聞こえていた。

格闘技好きで、本職のボクシング並みかそれ以上に本格的な武术系格闘技が好きな彼には、新鮮な驚きだ。こんな道場がこんな場所にあるとは、知らずにいたからだ。

あの岩崎涉己は、ここで仕上げた天才なのか。

武零流、には聞き覚えがある。警察の逮捕術にも採用されている古武术流派、とだけ知っていた。

名古屋は少し呆然としていたかもしれない。

「どうしました？」

急に声をかけられ、驚いて声の主を見る。

彼の視野のだいぶ下の方に、見るからに学校帰りという小柄な女子中学生が立って、大柄でいかつい名古屋を見上げていた。

外見が外見で、しかも超武闘派として知られる名古屋には、こうまで物怖じせず近寄ってこられた経験がない。

「いや、その」

思わず動揺してしまった名古屋に、少女は軽く首をかしげる。

「道場破り、じゃないですね。入門希望ですか？」

まっすぐ見上げてくる瞳が大きく、誰が見ても水準を遥かに越える美少女だったから、名古屋の動揺は、情けないことに大きくなるばかりだった。

「いや、そうじゃ……岩崎涉己にここに来るように……」

「ああ、涉己さんのお客さま」

ぱっと少女の顔が明るくなった。

「どうぞ上がってお待ち下さい。もうすぐ涉己さんも来る時間ですから」

腕をつかまれるのではないかと思うくらい距離をつめた少女は、身構えかけた名古屋の横を通過し、玄関の引き戸を開けた。

「私は道場主の娘です。 ついでに渉己さんの一番弟子です」

20名古屋、圧倒される

古流武術の流派だという名古屋の知識が間違っているわけでもないらしいが、道場主の娘という少女に通された武零流秦が丘道場の中は、建物がやや年代を感じさせるわりに、ひどく近代的だった。

まず、道場内の廊下には段差らしい段差がない。壁には全面に手すりまで設置されていて、まさにバリアフリーといった風情だった。「障害者の道場生もいますし、ケガのリハビリコースもあるんです」名古屋の視線を察したのか、少女が解説した。

「うちは武術の道場ですけど、健康が大前提の格闘技じゃありません。その人がその時に一番大切に鍛えなきゃいけないものを鍛える、その方法としての武術です」

大道場、と札が出ている出入口に着き、少女言葉を締めくくった。「涉己さんの受け売りですけど」

そして少女は道場に向けて一礼し、中に入る。なるほど、礼儀は他の武術と違いはないか、と思いつつ、名古屋もきちんと立ち止まって一礼し、一呼吸おいてから、板張りの床に足を踏み入れた。

中は天井が高く、町道場として想像していたより広い。柔道場なら3面ほどとれるだろうか。床はすべて板張りで、よく磨かれている。

壁には黒いマットが張られていて、厳しい稽古で吹き飛ばされても危険が少ないようになっている。まさかこの設備があるから涉己がああも簡単に人を吹き飛ばしたのだろうか、と見当外れな思い付きまで浮かんでくる。

道場の中には、意外にも小学生が十数人いて、少女の登場に沸いた。

「さーや先生だ」

「さーや先生こんにちは」

口々に名前を呼ばれた少女は、先生と呼ばれる身分らしい。

「待つて待つて、今着替えてくるから」

子供たちに慕われているのは名古屋にでも一目でわかる。囲まれて、まわりつかれて、さーや先生はそれでも笑顔で相手をしている。

「もつじき」

さーや先生が名古屋を見上げる。

「涉己さんも出てきます。それまで、こんなところで申し訳ないですけど、待つてもらえますか？」

「勝手に邪魔してる身だ、気にしないでくれ。端にでも座らせてもらうから」

傍若無人の怪獣呼ばわりされる名古屋だが、別に常識が欠けているわけではない。敵に負けたくないだけの話で、相手が友好的なら意外に虚勢を張ったり見下したりはしない。

「すみません。そっち側がお客様席ですから」

指された方に座る。

ちょうどこの時間帯が学生門下生が集まる時間帯らしく、次々に小中学生が入ってきては挨拶を交わしている。高校生はこれからののか、あるいは夜間からの稽古なのか、まだあまりそれらしい姿がない。

子供ばかりだとやはり飽きるのか、すぐにわいわいと遊び始めてしまう。

そのうち、さーや先生が戻ってきた。厚手の綿の胴着を着て裸足で道場入りする姿は、さすがに道場主の娘で、堂に入っている。

「さあ、アップするよ！ 遊んでないで並ぶ！」

さーや先生の一喝で子供たちは大人しく並んだが、すぐにごちゃごちゃと遊び始める。それを押さえるだけの迫力はまだまだ身に付いていないようで、さーや先生は苦労しながら子供たちをまとめていく。

そうしているうちに、高校生らしき姿もちらほらと見えるようになり、広い道場内がごった返してきた。

高校生になると小学生のように遊んでしまうということはない。空気自体は緩んでいても、落ち着きなく遊び回るといったことはない。ただ、体が大きくなり迫力が増した分、ちょっとしたふざけが大きな動きに見えてしまう。

さーや先生は、明らかに年上で体格も大きい高校生クラスにも一目は置かれているようで、子供たちをまとめようとしている彼女を、邪険にしたりからかったりする者はいなかった。道場主の娘だからなのか、他に理由があるのかは、まだ名古屋にはわからない。

それぞれにゆるやかなグループ分けがあるようで、アップもそのグループごとに、特に区切って一斉に始めるでもなく始まった。

この間、名古屋に注意を向ける者はほとんどいない。普段から見学者が多いのかもしれないし、来客を特別視しない文化があるのかもしれない。

アップを見ていると、かなり入念な柔軟運動を行っている。じつくり体をほぐすというより、もっと踏み込んだ、1ミリでも深く体が曲がるように、1ミリでも長く筋肉が伸びるように念を込めているような柔軟だった。

人によつてその取り組みには温度差があつて、ただでさえ柔らかい体をさらに伸ばそうとむきになっているような者もいれば、苦手な柔軟を義務感だけでどうにかやっている者もいる。

いえることは、名古屋から見ても、アップをなめてかかっているような門下生はいないらしいということだった。師範や師範代クラスの間がおらず、大人も混じっていない中で、アップの段階でこれだけ自主性が高ければ大したものだろう。

あまり柔軟が好きではなく得意でもない名古屋が、多彩な動きをする柔軟運動

に見入っていると、出入口から三々五々加わってくる門下生の中の一人の姿に、場内の全員が一斉に反応した。

「お疲れ様です」

「こんにちは」

かける言葉は年代によって違うらしいが、全員が全員同じ方を向いて、号令も出ていないのに口々に挨拶する姿は、その相手の権威の高さをそのまま表しているのだろう。

それらの視線の先に、渉己がいた。

「続けて」

軽く手を振ってそう応じた渉己は、さーや先生が身に付けているのと同じ胴着を着て、個性が無いのが個性というセミロングの髪を後ろでひとつに縛っている。

その顔が、学校とは少し違った。

相変わらずの無表情で愛想のかけらも無かったが、彼女の道場内での立ち位置を知らない名古屋にも感じられるくらいの威厳がある。渉己は道場に入ると、そのまま真っすぐ名古屋の方に向かって歩いてきた。

「早速のお出で、恐縮です」

「なにしろ敗者だからな、呼ばれればいつでも参上するさ」

すっかり毒気が抜かれた顔で名古屋が応じる。昨日負けたばかりで、こうも切り替えができるものかと本人が不思議に思うほど、敗戦からの心の建て直しができている。

「まあゆっくりしていつてよ。床が板敷きじゃ落ち着かないだろうから、そのマットも使ってね」

近くの床に立てかけてある丸めた黒いマットを指し、渉己は泰然という。落ち着き払って、堂々としている。

「今日はお客様として招かれているんだから、寝っ転がらない分には好きにしてもらっていいから」

そついうと、名古屋から視線を切る。

「紗綾、小学生組の今日の目論見は」

その声に、さーや先生が弾かれたように反応した。はいっ、と返事をする、渉己の目の前に駆け寄ってくる。

「上級組は基本組手の型、中級組は投げ技の受け身、初級組は初歩当て身型の練習をする予定です」

「オーケー。指導役は」

「上級は私が見ます。中級と初級は、矢木澤範士が見て下さいます」
「ふーん、今日は隆治が見るんだ。珍しいね。まあいいや、私もちよくちよく入るから、頑張りなさい」

「はい！」

「中学生以上は注目」

さーや先生への指示出しを終えると、渉己は声を張り上げた。

「あと10分でアップを終わらせて、今日の稽古に入るよ。最近怪我が増えてるから、柔軟は念入りにね」

言葉がひとつ終わるたびに「おす」と気合いが乗った返事が重なる。

不意に、名古屋は道場の壁にかかる名札の列に気付いた。

数百枚が段位や役職別に並べられているその札には、それぞれの名前がある。その最前列にあるのは「師範」の札で、「武藤輝久」とある。

その下に来るのは「師範代」の名前で、3枚かけられていたが、その中にいきなり「岩崎渉己」の名前があることに名古屋は驚いた。

高校一年生が師範代だと？

武術の世界で、師範代という名は重い。

実力で衆に優れ、精神性で他の模範となり、指導力で人々に認められて初めて得られる称号で、単に強いだけでも、教え方が上手いだけでも、名を与える幹部たちや周囲の声が決して師範代とは認めない。

格闘技全般が好きでよく見ている名古屋には、その辺りの呼吸も何となくわかるだけに、唐突に出てきた渉己の名前にびっくりした。同時に、少なくとも化け物じみたあの強さの秘密の、一端くらいには触れられた気がした。強さの理由ではないが、強さの証明ではあるだろう。

視線を札の列から下ろすと、渉己が柔軟運動を始めていた。見れば、想像はしていたが、かなり柔らかい。体操選手でも見ているか

のような、圧倒的な柔軟性だった。

渉己にそのパワーで吹き飛ばされているだけに、名古屋にとってはその柔軟性が驚きだった。ペツタリと床に両脚を広げきり、至って控えめに見える胸を完全に床につけたまま、両足の爪先をつかんでぐりぐりと足首を回している姿を見ていると、現実感が失われていく感じすらする。

ここに現れるまでに体は暖めていたのか、上気した肌には、すぐにうつすらと汗の気配が浮かぶ。周囲はそんな渉己の一挙手一投足にそれとなく注目している感じで、大柄でこつい体をしている者も多い中、地味で目立たないはずの渉己の存在感は、少なくともこの場ではただごとではない。

やがて10分ほどが経ち、渉己が立ち上がった。

同時に、高校生クラスの中でも特に体格が良い、それこそ名古屋が並んでも全く見劣りしない体付きの男が出てきて、「整列！」と大音声で道場内の空気を震わせた。

「これより昼間部上級群の稽古を開始する！ 師範代に、礼！」

この道場では、稽古始の挨拶は立礼で済ませる慣習らしい。渉己を中心に扇形に並んだ高校生門下生たちが、一斉に起立のまま頭を下げた。

渉己は、その挨拶を軽い会釈で受けると、無表情なまま口を開いた。

「さつきもいった通り、無駄な怪我が増えてる。監督者である私の責任だけど、筋肉系の怪我が多いってのは、準備運動の不足や水分補給のまずさなんかが原因になってると思う。各自の自覚の範囲で十分対応できる原因だからね。やるべきことは忠実に行う、そうやって怪我を少なくしていくように気をつけて」

渉己が言葉を切ると、一斉に「おすっ」という気合の声が返ってくる。体育会系の極み、ともいうべき光景で、そのそりい方も見事なものだった。

うちのボクシング部にはこういうの無かったな、と、名古屋は不

意に思い、それが自分の指導力の無さや人望の無さから来た物なのかと思いとすると、やや不機嫌になった。

あんな破格な高校生と自分を比べるな。ありゃあ、どうも正真正正の化け物だ。

上級生たちをも門下生としてあしらい、完全に威で抑えている涉己の姿に、名古屋はそう自分にいい聞かせるしかなかった。

21名古屋、戦慄する

武零流って、古流武術の一派じゃなかったっけ？

名古屋が首をかしげる間にも、ひとり、涉己の正拳突きで大の男がうずくまった。

涉己のあまり大きく無い手には、秦が丘校内で手合いの際に使われているのと似たようなグローブが着けられてはいるが、まともに正統派の空手が使うような正拳突きが腹に入れば、よほど鍛えていなければそれなり以上にダメージは来る。まして、涉己の正拳突きだ。

「さばきが甘い。いなすなら、きっちり相手の動きをトレースし尽くしな」

涉己の声が飛ぶ。

「次っ」

「おすっ」

挨拶のときに「上級群」という言葉が聞こえたくらいだから、彼らもそれなりに鍛えているはずなのだが、涉己の動きの切れは、この時も尋常ではなかった。瞬く間に門下生達の懐に入り、あるいは隙を突くと、したたかに撃ち込んでうずくまらせる。

その動きが、名古屋が知る限り、もっとも美しい部類に入る見事な空手の動きだった。昼休みに涉己の目の間に転がされた「唐手同好会」の連中のような、エセ空手とは格が違う。

次に彼女の目の前に立ったのは、挨拶の掛け声を発したあのごつい門下生だった。体付きからして涉己の倍はあるつかという体重を想像させる。腰を落として間合いを取るその姿には、風格すら感じられる。

対する涉己は、既に8人を相手にしているにもかかわらず顔色一つ変えずに立っていて、その姿勢もごく自然に力を抜いた体で、とても大男を相手に稽古をつけようという風には見えない。

それがいつものことなのか、門下生の大男は、気合の乗った顔付きで渉己の正面に立ち、間合いを保っている。

この時の稽古は、逮捕術として警察に採用もされている武零流らしく、「空手の有段者を捕らえる」というテーマに沿ったものだった。そういう説明があったから、名古屋も「誰か空手の有段者がいるのかな」と思っていたら、なんと空手使い役は渉己が務めるという。いくらなんでも、と思って見ていたら、渉己は見事な空手の技で次々と門下生を叩き潰していった。

大男の前に立つ渉己は、やがて無造作に一步を踏み出した。相手はその動きに合わせるように一步引き、間合いを保つ。

あそこで慌てるようじゃすぐにやられちまうからな。

名古屋は彼の間合いの取り方が、あくまで自分の攻撃範囲内に渉己を捉えつつ、渉己の攻撃範囲と想像できる範囲から外れる程度の距離感を保っていることを見て取っていた。

いくら渉己が信じがたいほどの速さを持っていたても、間合いの限界というものはあるだろう。背の高さも腕の長さも格段の違いがある以上、拳が届く範囲、いわゆるリーチの差は絶望的なほどだ。速度だけでどうにかなるものではない。

と思っている間に、渉己がさらに動いた。

相手の間合いに無防備なほどに正面から突っ込んでいく、その動きはさすがに速い。それでも、相手がまったく追いきれないというほどの動きではなく、相手はすつと腰を落とし気味に引きながら、渉己の動きを正確に捉えて捕まえようという気配を見せた。

受けて、流し、捕らえる。相手にダメージを与えるのではなく、無力化し逮捕することに特化した動き。大きな体でも、その滑らかな動きは美しく、洗練されて見えた。

名古屋が思わず声を出しそうになった瞬間、だが、その動きは渉己の天才によってあっさりと否定された。

踏み込みかけた左足をごくわずかに浮かせ、コンマ一秒にも満たないかもしれない間を取り、それから渉己の左足が床を叩いた。

そのごくわずかな間の差が、相手にとって涉己を捕らえる機会を奪った。

踏み込むと同時に上体を折り込むように下げた涉己の体を、相手は捕らえきれずに空振った。次の瞬間には、腰の回転で体を起こしかけた涉己がさらに勢いをつけて相手の懐に飛び込み、一旦間を置こうとした相手にその隙を与えず、右足を踏み込んだ時にはその体が腰を中心に横倒しになっていた。

勢い良く回転した涉己の左足が、上から相手の脳天を下に射抜いた。

「胴回し」

などともいうが、要は体を横倒しにして縦回転の回し蹴りを打ち込んでいた。空手でもかなり派手な決め技の一つだ。

そんなものをまともに受けてしまえば無事でいられるはずもなく、相手はひざから崩れるように倒れこんだ。

「初撃から受けようとするからだろ、間合いを取っていれば安全だなんて考えは捨てる。相手が崩れるのを待つか、相手を崩せ。捕らえるのはそれからだ、順番を間違えるな」

助け起こしもせずに涉己がいうと、何とか意識は保っているらしい相手が、うめくように「おすつ」と答えた。

名古屋は感嘆するしかなかった。

この女、本当に空手の有段者の實力を持っていやがる。それも、昨日今日黒帯を取ったばかりという力とは段違いの。

涉己でなければ、相手は余裕を持って捕まえることが出来たはずだ。この女が凄すぎるだけだ、と、名古屋は改めて戦慄する。

なんなんだこいつは。

高校一年生の分際で師範代、というも、なんとなく納得行く気がするから恐ろしい。

驚きはまだ終わらない。

上級群の門下生をあらかた倒すと、今度は丁寧な指導が始まった。指導は、まず先ほどの稽古の再現から始まる。

その再現度が度外れていた。

「この距離で私がここまで踏み込んだけど、実戦空手はもう10センチくらい踏み込んで、こう来る場合がある」

などと、そのときそのときの相手に組ませて全員に例示していくのだが、自分と相手との細かい間合いの差や踏み込みの角度、ひじの入りの位置、指使いまで、微に入り細を穿つ再現をしつつ、それを解説し、さらに指導していく。

その指導の論理性の高さが名古屋を驚かせた。

「相手の打撃は、大抵の場合はインパクトの瞬間に最大の破壊力がある。重量に加速度をかけた数字が破壊力になるのが通常の打撃だからだ。位相差を利用して『押す』という力を加えていく、太極拳あたりの打撃とはそこが違う」

「『押す』打撃は別に神秘的なものじゃないけど、使うのが難しい。無理に覚えなくてもいいし、そんなものを自在に使う相手に出会ったら、とつと逃げ出すのがセオリーだ。無理に相手をするな」

「空手の正拳をまともに正面から受け流そうとするのは馬鹿げてる。訓練された正拳は、まず出させないようにすること。出してきたもいなせるように常に間合いを斜めから取ること。相手の構えに正対するしかなくなったら、とつと逃げる」

渉己は「逃げる」という言葉をたびたび使う。

名古屋自身はそんな教えに従いたいとは思わないが、一方で、逮捕術としては正解だとも思った。

逮捕術とは、相手も自分も無傷でなければ意味が無い。それが出来ないのであれば、逃げて次のチャンスを待つのも必要なことだったし、その程度のことは名古屋も身を以って知っていた。競技じゃあるまいし、喧嘩や逮捕術に逃げを禁じるルールは無い。最後に勝つていれば、あるいは捕らえていれば、それでいいのだ。

このあたりになると、名古屋は涉己と競り合う気を完全に失っている。

格が違いすぎる。

その一言に尽きる気がしていた。

ただ強いだけではなく、門下生をまとめ上げていく統率力といい、指導力といい、高い論理性、知識、さらにそれを説明する能力に至るまで、名古屋が比肩できそうなところは見当たらない。

負けるわけだぜ。

途中から、力を入れて見ているのが馬鹿馬鹿しくなってしまう、名古屋は壁にどつしりと背中を当て、片ひざを立てた上に腕を寄せ、完全にリラックスモードで観戦していた。

やがて時間が経ち、時計が6時半を回ろうとする頃、別の見知った顔が大道場に入ってきた。

「戻りましたー」

のんきな声を出して扉をくぐってきたのは、彫りの深いきれいな顔立ちをした少年だった。

矢木澤隆治、涉己のセコンドにいたから名古屋も顔は知っている。

「お疲れ。全員帰した？」

涉己が尋ねると、隆治はぺこりと一礼した。

「小学生は全員帰宅させました。中学生は一部、武藤と居残りをしています。師範がお見えでしたので、後はお任せして来ました」

「師範が？ ずいぶん早いね」

「裁判の打ち合わせが終わって直帰してきたとおっしゃっていましたが」

「ふうん。珍しい」

隆治は、道場では涉己を幼馴染ではなく、師範代として礼節を尽くしているようだった。わざとらしさもなければ気負いもなく、こ

く自然にそうしているように見える。

その隆治が、目の端に来客を認めたらしく、名古屋を見た。わずかに驚いたような顔をした後、会釈を送ってきた。

端然としたその礼が気持ち良かったから、名古屋はごく自然に姿勢をあぐらに戻し、自分も一礼した。

「お出ででしたか」

「ああ、涉己に招かれてな」

「昨日の今日で呼ばれましたか」

隆治は屈託無い笑顔を見せた。名古屋も笑顔を返す。

「なかなかいいものを見せてもらえたよ」

隆治が横に並んで座った。

「驚きましたか」

「驚いたな。負けるわけだと納得もしたさ」

「さすがですね。中途半端に強い奴が一番負けを認めたがらないんですけどね」

「俺が中途半端以下に弱いつてことか」

「逆です。ちゃんと実力を短時間で認めて納得できるだけの、目と覚悟を持っているって事です。強くなるうとする人間なら、必要なものじゃありませんか？」

「どうだかな」

名古屋は自嘲気味に返したが、生意気に聞こえる隆治のその言葉が、隆治自身、涉己の強さを素直に認めつつも、自身が強くなるために覚悟を持ってその強さを見つめ続けている証明のようにも聞こえた。

「こいつも強いな。」

隆治が実際に稽古をしている場面を見たわけでもないのに、名古屋はごく当たり前のようにそう思った。

「こいつらは強い。」

とんでもない連中が秦が丘に現れたということを、名古屋は震えるような感覚と共に理解した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1004j/>

サイキョウショウジョ

2010年11月23日20時56分発行